ISSN 1882-434X
東北大学文学部・文学研究科
July 2014 Vol. 9

街へ、時代へ、跳びだした 東北大学文学部ブックレット

考えるということ

この本の立場▶実利偏重・通俗功利主義がはびこる時代、東北大学文学部・文学研究科は、あえて「人文知の価値」を示したいと思います。この本は、軽佻浮薄な文化への対立軸としての重厚な伝統的学問文化を守り、発展させる媒体です。現実の問題から目をそらすのではありません。「企業の社会的責任」を意識する先進的な企業と対話・連携し、あるいは書店や図書館、地域社会との対話を通して、人文社会学的立場から、責任を持った発言をしていきます。さらに、大学で学びつつある、あるいはこれから大学で学ぼうとする若い世代に、「真の実学」としての人文社会学の心髄を伝えたいと思います。ネットを中心に、匿名性を隠れみのとした無責任な発言が、なんとあふれかえっていることでしょう。この本では、研究者ー高校生・大学生ー卒業生ー企業ー地域社会を結んで、＜文学部流＞を徹底したらこうなる、という情報の発信をめざしていきます。

3つのシリーズ特集

シリーズ企業との対話・社会との対話 9
巻頭座談会
『「地域」再考 ー復興の可能性を求めて』で考えたこと ❷

東北大学文学部の歴代研究者メモリアル 9
英語と日本語の言語の可視映像化にも取り組んだ英文学・比較文学研究者 土居光知博士 ⑬

文学部の研究紹介 9 心理学
阿部恒之教授 3・11東日本大震災以後の〝災害文化〟研究への深化 ⑰

広く、深く、高く!! 多彩なシリーズ

図書館・書店との対話 9
宮城県図書館との対話
「東日本大震災文庫」で、震災の記憶を記録に未来へ ⑩

文学部へ行こう 9
トピックス 特集 東北大学文学部の総合性を地域へ、企業へ、世界へ ㉔
ニュース&インフォメーション ㉖

文学部ゆかりの宝もの 9 東北大学史料館に残る
文学部教員の遺品 ㉘

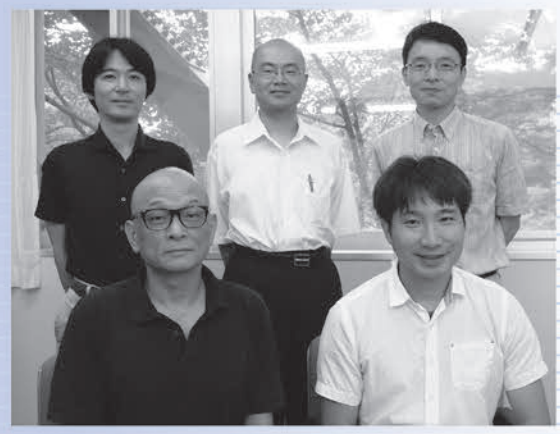
可視と不可視

撮影／菊地美紀

学問の役目は何か。不可視な事象を可視化することである。たとえば東北大学大学院文学研究科には、貝塚や古墳などから出土した資料（写真は宮城県沼津貝塚骨角製笄）も含めて、世界中から集められた数多くの資料が収蔵されている。これらの資料との出会いから何が生まれていくか。時間的、空間的に、どこまで遡り、広げることができるか。さまざまな可能性があるだろう。その時、肝に銘じなければならないことは何か。「いま見えている一つのものは、たまたま目の前にあるものに過ぎない」、「ここから分かることも、無数にある解の一つに過ぎない」、「すべてが、途中過程である」ということではないか。そして学問とは、それらの〝解〟相互の淘汰により発展していくものである。淘汰の場の大小及び水準によって速度に差は出るとしても、改竄や捏造、未熟や不知は、自然に淘汰されていくに違いない。

巻頭座談会

『「地域」再考ー復興の可能性を求めて』で考えたこと



2012年度「有備館講座」「齋理蔵の講座」からのスタート

2014年3月、東北大学大学院文学研究科出版企画委員会（代表:嶋崎啓教授）編「人文社会学講演シリーズ」Ⅶの『「地域」再考ー復興の可能性を求めて』が東北大学出版会から出版されました。

文学研究科の講演出版企画委員会（委員長:高橋章則教授）が主体となって進めている地域連携講座である「有備館講座」と「齋理蔵の講座」での講義を単行本にまとめるシリーズであり、本書は2012年度に実施された「地域再考」をテーマとした講演の一部をまとめたものです。

2012年度当初の講座広報において、その趣旨については次のようにメッセージされています。

期せぬ天災は、われわれの社会に試練を与えました。奪われた生命、帰れぬ家、消え去った文化財とダメージははかりしれません。しかし一方で天災は教えてくれました。人々のつながりが命を救うこと、ふるさとが心の支えとなることを。

われわれはあの日以前に立ち戻ることはできません。智恵を結集して新たな地平を切り拓かなければならないのです。

東北大学文学研究科は、われわれの命を、心を支えてくれた「地域」のありかたを、日本のみならず世界の歴史や文学思想、社会問題などの中で問い直してみたいと思います。地域再興の一助になれば幸いです。

そして2014年3月、10編の講演のうち6編をまとめ、文学研究科出版企画委員会・嶋崎代表の巻頭言を加え、若干のタイトル修正、内容の加筆なども行った上で、『「地域」再考ー復興の可能性を求めて』として公表したのです。

[有備館講座のプログラム]
(2012年5月12日~9月15日)

- 地域の文化を芝居にしよう! ーイギリスとアイルランドにおけるコミュニティ・ドラマー：岩田美喜准教授（英文学）
- 中国の村落における地域のつながり、祖先とのつながり：川口幸大准教授（文化人類学）
- 戦国時代東北の「地域」 ー新発見「遠藤家文書」から見るー：柳原敏昭教授（日本史学）
- 地域の自治と自立を考える ー社会学の視点から：永井彰教授（社会学）
- 三蔵法師玄奘が学んだナーランダーの地位と大学：吉永清孝教授（インド文化学）

[齋理蔵の講座のプログラム]
(2012年6月2日~10月6日)

- 失われた遺跡の再発見：鹿又喜隆准教授（考古学）
- 死者の記憶と世代の継承：辻本昌弘准教授（心理学）
- 中国の思想と宗教における広東：齋藤智寛准教授（中国思想）
- 外国人とともに生きる ー地域における共生を考えるー：永吉希久子准教授（行動科学）
- 一条の光：戸島貴代志教授（倫理学）

■『「地域」再考ー復興の可能性を求めて』の目次

はじめに　嶋崎啓（ドイツ文学）

地域社会の自立を考える　永井彰（社会学）

「共生の場」としての地域　永吉希久子（行動科学）

中国の村落における地域のつながり、祖先とのつながり
川口幸大（文化人類学）

中国唐代における広東ー地域イメージの多面性についてー
齋藤智寛（中国思想中国哲学）

失われた遺跡の再発見ー遺物が秘めた記憶ー
鹿又喜隆（考古学）

ふるさとの音 ー自覚ということー
戸島貴代志（倫理学）

そもそも地域とは何か、という問い直し

では、『「地域」再考―復興の可能性を求めて』は、どのような内容にまとめあがったのでしょうか。

本書の「はじめに」において嶋崎代表は、地縁血縁関係が弱まった現代だからこそ住んでいる場所との関わりが重要になっているのではないかと提起した上で、「そもそも地域とは何か」と問い直したことを左記のようにまとめています。

このような視点に立ち戻り、本座談会では、文化人類学・川口准教授、中国思想史・齋藤准教授、考古学・鹿又准教授、倫理学・戸島教授が、「そもそも地域とは何か」というテーマにどのように答えたか、今後、どのように展開しようとしているか等について話し合いました。

全く研究分野が異なり、通常はなかなか触れ合うことのない研究者が、「地域」を媒介にどのような考えを提起し、議論を交わせたのか。

以下に4人の論考のさわりの部分を引用紹介し、座談会へのイントロダクションとします（社会学・永井教授、行動科学・永吉准教授の論考に関しては、7pに紹介します）。

嶋崎 啓教授（ドイツ文学） *Shimazaki Satoru*

九州大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。２００５年～東北大学在職。ドイツ語史、日独対照言語学、ゲルマン語学などを専門とする。

■嶋崎啓教授の巻頭言

二〇一一年の東日本大震災は人が生きる基盤としての地域の重要性をあらためて見直すきっかけを我々に与えました。人はそれぞれ個人として生きていますが、他の人々との助け合いの中で生きていることも確かです。特に震災のように、個人を外部から守ってくれるさまざまなものが突然一挙に奪われるような状況では、住んでいる場所からの助けが必要になります。現代の日本では、生まれた場所から離れずにずっと住み続けて、そこで一生を終える人は減り、無縁社会と言われることもありますが、地縁血縁の関係が弱まった今だからこそ、住んでいる場所との関わりが重要になっているのではないでしょうか。

そうした中、そもそも地域とは何かということをあらためて問い直すことにも意味があるでしょう。東北大学大学院文学研究科はその点、古今東西のさまざまな場所と時代を研究対象にしていますので、この問題について考えるためのいろいろな材料を提示することができます。それは必ずしも地域復興に直接役立つ情報ではないかもしれませんが、一歩引いて大局的な視点を持ち、地域再興について再考することも有意義ではないかと思います。

川口 幸大准教授（文化人類学） *Kawaguchi Yukihiro*

東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。２０１０年～東北大学在職。著書に『東南中国における伝統のポリティクス―珠江デルタ村落社会の死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織―』、共編著に『現代中国の宗教―信仰と社会をめぐる民族誌―』等。

■川口幸大准教授の主張点

孔子が「孝は人の根本」と説いた中国において、祖先を祀るという行為は、単に私的ないとなみにとどまらず、国家による統治のロジックとして重要な位置づけにありました。しかし二〇世紀に入ると、祖先祭祀は旧社会の悪弊として徹底的な排撃の対象とされ、とりわけ文化大革命の時期には墓は破壊されて、祖先祭祀も中断を余儀なくされてしまいました。その後、一九七〇年代の末から共産党政府が締め付けを緩和すると、祖先祭祀は一気に再開されはじめます。婚出した女性が子どもを連れて生家の墓に参るなど、祭祀の参加者はむしろ増えていますし、現代の社会事情に合わせた数多くの祭祀用品が用いられているのも特徴的です。２０００年を過ぎるころになると、共産党政府は火葬の徹底や公営墓地の建設など一連の政策によって管理の程度を強めつつ、清明節を祝日にして、祖先祭祀を公的に認可しました。祖先をうまく活用して円滑な統治を進めていこうとする党政府のもくろみの一方で、人々の側では、それに従うところは従い、時にそれを受け流しながら、祖先祭祀を続けています。

このように「伝統」と見なされるようなことがらは、決して過去から脈々とかたちを変えずに維持されてきたわけではなく、衰退したものや失われたものを再び興すこともできるでしょうし、それが未来に「伝統」と称されるようになることもきっとあるのでしょう。ものごとは変わりうる。そこに「地域再考」の手がかりと、「地域再興」の希望が見えるのではないでしょうか。

齋藤 智寛准教授（中国思想中国哲学） *Saito Tomohiro*

東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。２００８年～東北大学在職。中国宗教思想史、六朝隋唐思想史を専門とし、「荷沢神会の見性論とその変容」「王弼の見た『老子』」などの論文がある。

■齋藤智寛准教授の主張点

ある地域にどのようなイメージを付与するか。それは、話者それぞれの立場において、他者からのまなざしと自己規定、そして他者へのまなざしとが複雑に混じり合う中で決定されるようです。筆者の勤務する東北大学の所在地、日本の東北地方にもまた同じことが言えるでしょう。たとえば平安時代の平泉は京都から見た辺境でしたが、中国を基準とすれば京都も平泉もおなじく辺境となります。奥州藤原氏は中央たる京都の文化を取り入れつつ、もう一つの中央である中国（宋）とは京都を介さず直接の交流を持っていました。このように、いわば二枚の地図が重ね描きされたような世界の中で彼らはどのような自己認識を持っていたのか、現代の東北に生きるわれわれのことも含めて思いをめぐらさずにはいられないのです。

鹿又 喜隆准教授（考古学） *Kanomata Yoshitaka*

東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。２００９年～東北大学在職。先史時代の石器研究を専門とし、日本だけでなく、近年はロシア、モンゴル、エクアドルでも調査研究を行う。

■鹿又喜隆准教授の主張点

考古資料のもつ意味を明らかにしなければ、資料のもつ歴史性や、モノのもつ記憶について、正しく理解することはできません。その意味では、博物学的に、考古資料を収集するだけでは不十分です。個別の考古資料がもったであろう、当時の認識やイメージを理解するための研究が不可欠と言えます。先にあげた遺跡・遺物の保護の点でも同様です。資料を収集・保管するだけでは不足しているのです。当時、その場所や道具が連想させた「記憶」そのものを理解する取り組みが必要です。その点を意識して、研究をおこなえば、遺跡は正しく評価されることになり、発掘とは別の意味で、遺跡は再発見されることになるでしょう。遺跡や考古資料を見ただけで、ふと当時の人々の思いや記憶を、みんなが連想できるように、考古学が貢献できれば嬉しい限りです。まるで、アルバムの中の写真を見た時に、被写体に繋がる様々な記憶が蘇るように、考古資料が同じ役割を果たしてくれれば素晴らしいことです。

戸島 貴代志教授（倫理学） *Toshima kiyoshi*

京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。２００５年～東北大学在職。ドイツ、フランスの現代哲学、生の哲学、実存思想を専門とし、著書に『創造と想起』『技術倫理入門』など。

■戸島貴代志教授の主張点

ある水俣病患者との出会いを契機に『苦海浄土』を書いた石牟礼道子さんは、それ以降のみずからの生活の一切を「出会ってしまった責任」と表現しています。発端は、たまたま通りすがりに病院の廊下から見た一人の水俣病患者の姿だったそうです。十七歳のその青年は冷たい病室の床に転がされていたといいます。その姿に目を奪われ、一撃をくらったかのようにその場に釘付けにされて以来、その後の生涯を水俣病患者の声を代弁することに捧げた石牟礼さんの存在は、よく知られているように、理不尽な病に苦しみ抜いた患者たちにとっての一条の光となりました。苦悩する患者たちの命を前にして、それまでの慣れ親しんだ居心地のよい世界から放り出されたかのように、彼女はそのままその命に染め抜かれたのだと思います。こうして、或る意味では患者以上に苦悩する石牟礼さんの存在は、「ミナマタ」に苦しむ人々にはもちろん、「ミナマタ」を生んだ社会にも、かけがえのない一縷の希望となりました。

一瞬目を奪われはしても、次の瞬間おそらくはだれもが遣り過ごす、その〈遣り過ごしてはならぬもの〉を、石牟礼さんは遣り過ごしませんでした。遣り過ごさず、いや遣り過ごせず、むしろそれに襲われ染め抜かれ、そのかぎりで彼女の「誠実」は一種の狂狷（＝かたくなにして一途であること）ともなったのだと思います。それは自分を作り替えるあのしなやかさあっての狂狷です。この狂狷では、なんでもない偶然の出会いが絶対的なものとなります。絶対的となった偶然は運命といってよいでしょう。運命が出会いをもたらすのではなく、出会いを遣り過ごさぬ誠実が己れの運命を生み出すのです。

改めて振り返って―何を伝えたかったのか

嶋崎 皆さんの論考から得られる一つの大きな結論は、地域とは人が作るものである、ということです。地域というものには、いろいろの定義があります。これまでのイメージとしては、土着的というか自然発生的というか、いつの間にかそこに生まれているものというイメージがあったと思います。しかし必ずしもそうではなくて、人が作るものであるから、人が変えていくことができるのだとも思います。だから、一旦損なわれたものでも変えていくことができるというのが一つの救いとなるのではないでしょうか。

川口先生は、中国の村落における地域のつながり、祖先とのつながりという論考において、伝統的な行事である祭祀というものも、ある意味政治的なことで変わる要素があるのだと書いています。まず、そのあたりから説明いただきたいと思います。

川口 このテーマをいただいた時に、地域の問題について直接役に立つとか、解決策を講じるというのは私の専門からいっても難しいと思いました。そこで、私が十数年調査している中国の農村社会では地域とはどういう形であるのかという所から始め、そこから日本の地域を映し出し、考えてみるとよいのではないかと思いました。

中国の地域というものを見た場合に、ここ100年くらいだけをとってみても、かなり大きな変動がありました。共産党が革命を起こして中華人民共和国を建ててから様々な政治運動や経済改革などがあり、そこに暮らす人々の日々の生活が変化し、祖先を祀ることに関しても、一時は完全に途絶えてしまったという時期がありました。しかし、その後の政治・経済の変化を契機に復興し、再び盛んになっています。そういう意味では、「変わりうる」ということに私は希望を見出しています。

嶋崎 私の理解では、文化人類学は未開社会に入っていって現地調査するというイメージですが、そうではなく、中国の現代社会の論考となっていますね。

川口 現代、特に20世紀後半以降は、グローバリゼーションが進み、移動する人も増えてきて、純然たる「未開社会」というようなものはもはや存在しない世界になっています。だから今日では、フィールドワークも先進国の都市で行う場合もありますし、私のように中国の農村社会で行うということもあり、研究対象は多様化しています。

文化人類学的に見れば、地域とは、人と人の関係性から意味ができてくるところと私は捉えていて、実際に人々がいとなんでいることや話している言葉などから立ち現れてくるのが地域社会であろうと考えています。

そして政治というものは、本来は社会なり人なりを統治する、もっと大雑把に言えば、みんなが上手く暮らせるようにする仕組みであると定義することができます。だから、政党政治というシステムが存在しない社会で人々はど

いうルールや決まりに基づいて生活していたのかという意味での政治というのは、文化人類学にとって古くからのテーマです。人々が暮らしているところには常に政治というものはあるわけなので、ポリティクスは一つの大きな研究のテーマであり続けているのです。

嶋崎　齋藤先生は、中国唐代における広東を題材にして、地域のイメージというものが見方によって全く逆転するという面白い視点を提示されていますね。

齋藤　ここで書こうとしたのは、誰がその地域を描写するかで地域のイメージが全く違ってくるということでした。そこで、南部沿岸の広東を例にとって、前半は官僚が書いた文章を資料にし、後半は仏教徒が書いた資料を材料にして考えてみたわけです。

官僚が書いた文章というのはどういうものかというと、地元民が書いたものではないということです。中国の官僚というのは日本の藩政時代の武士とちがって、全国を転任、転勤するものです。その官僚が見た地域というのは、見られることによって初めて見出される地域ということになります。特に10世紀以前の中国では文字を読んで書ける人は一握りの人間であり、統治者イコール記録し、様々なイメージを生産する人であり、地域に住む庶民が自分たちのことを記録したわけではありません。

その上、伝統的な中国の知識人がものを言う時には必ず古典に規範を求めるということがあります。例えば広東なら、広東という地域は理想化された古代中国の一部であったのか、なかったのかということが問題になります。古典に既定された地域イメージとか伝説のあり方というのが中国における地域というものの特徴にもなっている、とも私は捉えています。

後半は仏教徒が書いた資料を材料にしていますが、仏教というのはインドから来たものであって中国のものではないので、インドを含んだより広い地理概念が関わってくることになります。その視点でみると、漢民族の土地とインドという関係になります。例えば広東は、仏教徒にとっては海路でインドと直結しているところというイメージになってきます。しかし一方では、広東が辺境であることを認めたうえで、広東人のような田舎者であっても仏なんだといった言い方がされるわけです。そういう言い方をすると、どんな人間であっても仏だということが非常に効果的に主張できるということになり、仏教徒が示す地域イメージは時として非常に重層的なものになるのかなと思います。中国の僧侶が文章を書くときには中国という言葉でインドを指す場合がかなりあって、そういった人々にとっては、地域を考える時に漢民族の土地の都から遠いとか近いとかがそれほど問題ではなくなるだろうと思います。

嶋崎　川口先生と齋藤先生は中国の同じような地域を扱っていて、川口先生が現代のことで、齋藤先生が古代のことを書いているわけですが、お互いに参考にするとか、影響し合うといったことはないのでしょうか。

川口　広東は、歴史的に中央から見ると辺境の辺境で、異民族が跋扈しているというようなイメージで見られていた地域です。ここに住み始めた漢民族の人々は、いかに自分たちが蛮族や異民族ではなくて、中央の版図に帰属する正統な漢人であるかということを強くアピールしようとしてきました。そのため、一族で盛大に祖先祭祀を行い、お墓をつくるなど、中央で正統とされたやり方を受け入れて実践してきたのです。一族で何百人、何千人が集まって祖先祭祀を行っているのは広東や福建であり、それは歴史的な辺境性の、ある種裏返しなのだろうと考えられます。

辺境であるがゆえに正統性にこだわってきたことが現代にまで繋がっているという意味で、齋藤先生の分析と通じるところがあるのではないでしょうか。

嶋崎　鹿又先生は考古学者として、失われた遺跡の再発見ということを踏まえた上で、想像力の大事さということを論考されていますね。

鹿又　私は専門が考古学でして、この講演をした丸森町は10年くらい前に調査で訪れていた場所でした。そのような丸森町で何を話そうと考えたとき、遺物とか遺跡という考古学の資料というものは、それを見る側の経験が変われば見え方も変わるのではないかということを一緒に考えてみようと思いました。考古学という分野は、客観性というか、実証的な性格が重視される学問です。しかし、その客観的な歴史というものはどのくらい妥当なのか、東日本大震災を経験した今、改めて問い直してみようとしたわけです。

端的な例として、宮城県の沓形遺跡という、弥生時代の津波堆積物が出た遺跡を例に挙げました。東日本大震災以前から調査していたので、どの辺まで津波が来たかという情報はわかっていたのですが、やはり実際に経験することとは違います。東日本大震災を体験してはじめて、その情報が具体的になり、ものの見え方が変わりました。そういうところから遺跡とか資料について考えていこうと思ってまとめたのが、この内容です。

嶋崎　震災以前に既にそういう遺跡があり、ある程度教えてくれるものがあったはずなのに切実なものではなかったとすると、私たちはどうすれば歴史が教えているものを知ることができるのでしょうか。震災を経験しなければ分からないのか、ということにもなりかねませんね。

鹿又　それに対する答えを、この論考の後半に書いているつもりですが、想像力ということなのではないでしょうか。

人間は、想像力、つまり自分が経験しなくても共感できる、心理的共感を持てるということが優れているところなのではないでしょうか。我々人類がいまも地球上に生息しているのは、それが理由だと思います。人間には、経験しなくてもわかる部分があります。それを作っていくというか、共感できるようにしていくのが、例えば考古学の分野であれば考古資料から人の心理的な作用がどうだったかといったところまで想像し、伝えていくプロセスなのではないかと考えています。

経験は大事ですが、経験しなさいというのではなく、経験しないで分かるようにしていく手続きが大事なのかなと思っています。そのためには、教育も大事だと思いますし、そういう場を設けることが大事なのではないかなと思います。考古学の分野では、文化財として資料を残

すという行為もとても大事です。

この講演では「失われた遺跡の再発見」とタイトルしましたが、失われた遺跡というのはもう既に壊してしまった遺跡です。それをどのようにしてもう一度、歴史の議論の中に盛り込んでいくか。私自身は、以前から地元の郷土史家が集めた資料などをまとめて公表するということに取り組んできましたが、そのような地道な取り組みが必要であるということを強く感じています。

震災関係でいえば、震災遺構、被災遺構があることで初めて関心が持てる、記憶が戻るということがあります。記憶にとっては、物の重要性、資料の重要性ということがあり、物自体をよく知っている方、経験された方、深く理解している方に説明してもらうことが大事だとも思っています。

嶋崎　そのような考え方は、現代における地域を考える時にも大事なことなのでしょうね。想像力を働かせれば、自分が住んでいない別の地域について考えることが可能になるという面があると思われます。

想像力ということでいえば、戸島先生の論考では、内省すること、自分自身と向き合うことの大切さが論じられていて、そうすることによってそこに「ふるさと」というものが存在するといった内容かなと感じましたが…。

戸島　川口先生、齋藤先生、鹿又先生は、歴史的裏づけや地理的裏づけという、地に足のついた分野でずっと研究されていて、なるほどと思うことばかりでした。

それに対して、哲学から何が話せるか。宙に浮いた話の極みになってしまいそうですが、一言で言うとすれば、「自覚」という言葉に集約されるものへのイメージを持っていただきたいということです。

普通、自覚というと、例えば教師としての自覚を持てとか、もう二十歳になったのだから自覚を持てとかという風な、つまりは自分で自分を反省して、こうしなければいけないといった風に考えようということですね。

しかし僕がここで言おうとしたのは、もう少し基本に立ち返ったものです。例えて言えば、芽と樹木があって木に花が咲くという、その芽と樹木の関係で考えた時に、芽にとっての存在基盤である樹木の存在を、芽はどのようにして分かるのか。それは、芽が樹木を振り返ることによってではなく、芽が充分に花開くことによってなのではないかと考えました。そして人間の例に置き換えて言えば、私が私の存在基盤をそれとして理解するのは、私を振り返ることではなくて、私が充分な私として花開かせることなのだと。

未来へと向けた自己実現を、私はここでは自覚と呼んだわけです。その芽が充分な芽たりえてる、つまり芽がそれのおかげで己となっている土壌において、芽自体がどのようにして完全に実現させるか。人間の例でいうと、私がそれによって私たりえている、私の土壌をどのようにして実現するか、それが自覚なのです。

そして、この己の存在基盤のところに位置するのが「ふるさと」だと、私は規定しました。自分がそれのおかげで自分たりえている、大きな意味で自分を育んでくれているもの、自分を支えてくれているもの、自分を自分として形成してくれているもの。物質的な意味でも、観念的な意味でも、歴史的な意味でも、地理的な意味でも、文化的な意味でも、社会的な意味でも、あらゆる意味で自分がその中で自分となってきた環境が「ふるさと」です。

そういうものを、私という存在は、どのようにして自覚できるのか。自分が、その中にあって、十全な自分となっていくこと、そういう未来に向けて自分を花開かせていくことが自覚だと、僕は書きました。その時、僕の前には、3・11以降、ふるさとがズタズタに されてしま った地域があり、それでもなおそこに生きる人々がいました。それらの人々が未来へと向けて己を実現していこうとしたときに、そこにふるさとというものはもう一度芽吹くのではないか。単なる物質的なものでもなくて、人間が前向きに生きる生命力というものの中にもう一度芽吹いてくるものがふるさとなのだろう。それは、延々と続けられてきた歴史あってのものだけれども、人間の決意のようなものが入ってこないと、ふるさととしては復興してはいかないだろうと、僕は考えました。

嶋崎　樹木の本体と、私を成り立たせる土壌と、ふるさとというのは同じものだということですね。そして戸島先生は、禊を否定されています。要らないものを排除することによって本質というか核というか、中心になるものを目指すという考え方はとらない。それとは逆に、自分をどんどんと広げ、宇宙にまで拡大してこそ初めて自覚が可能であるという発想に、私は共感できるところがありました。

戸島　それも、森羅万象は結局繋がっているという視点から導いた自然な考え方です。

僕は、真言密教のシンタイセイをコウテンするという考え方から禊の否定ということを導き出したのですが、身体的なものをそぎ落とし、中枢の部分だけを残すような考えは違うだろうということでした。けがれをそぎ落としてしまって、けがれていない綺麗なところだけを残すというのではなく、けがれも何もかも全部丸のみにしてしまうのが仏なのだと僕は思うのです。

自分の身を削ぐよりも、自分の身を拡大していって、森羅万象と繋げていくことの方がもっと清浄なものに、清らかなものに向かっていけるような感覚が僕の中にはあります。

齋藤　己の身体を拡大していくという事については、この論考を読んでいて、強く印象に残っていました。では、この考えを発展させたとき、己の自覚すべきものの存在基盤がふるさとだとすると、ある人物の自覚と、別な人物の自覚は、どのように関わってくるのかということが問題になってくるのではないでしょうか。

戸島　その点について僕は、自分が根ざしている場所がふるさとという土壌である限り、自分以外の誰かさんも共有しているだろうと思っています。というのは、一人のもとでおこる自覚というのは、おそらくなんらかの仕方で、その周辺にいる、土壌を共有している誰かさんとの間でも、なんらかの形で同じ自覚に至るような感じがするのです。つまり、一人のもとで起こる自覚というのは、上手くすると、ひょっとすると伝播するかもしれない。自覚というのは、多くの

人間の中で、ある共通に起こる何かではないか。土壌のサイズが、そのまま自覚のサイズに繋がるのではないか、と僕は思っています。

齋藤　伝播なのか共有なのか。それと、Aさんの自覚とBさんの自覚のあり方が違ってしまった場合どうなるか。どう解釈すればよいのでしょうか。

戸島　ちょっと妙な、滑稽な例になるかもしれませんが、3・11で、ある地域がズタズタに壊されてしまいました。その中で複数の人々が立ち上がった時に、この複数の人々を通して見えてくる、ある種のふるさと性というものがあるとしたら、それは、どこかである種の親近性のようなものがあるのではないでしょうか。AさんBさんCさんDさん、それぞれ体験は違うけれども、共通の何かが見える。それが見える限り、それこそがふるさとと言えるだろうし、両面のモメントがいつもあるのだろうと思います。

齋藤　ところで、戸島先生は「地域」ではなく「ふるさと」という言葉を使っていますが、どのような違いを込めているのでしょうか。

戸島　「ふるさと」は、「古きもの」という事で強調したいという思いでした。

私の誕生よりも、時間的に以前にある「古きもの」としてのふるさとと、私と共に、私を支えてくれるものでもある限り、私にとって構造的な以前でもある「古きもの」という二種類の意味を込めています。

嶋崎　理解しにくところがありますが、時間的な以前と、今に発現している現在というものがあり、ここで語られているのは未来の可能性ということであると私は理解しています。それ

永井 彰 教授（社会学） *Nagai Akira*

東北大学文学部卒業、東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。１９９４年～東北大学在職。理論社会学、福祉社会学を専門とし、共著書に『批判的社会理論の現在』等。

■永井彰教授の主張点

いまの状況では、安価な労働力だけを求める会社は、アジアに向かいます。そうすると、それでもこの土地に立地する会社はどのようなものになるでしょうか。一つの可能性は、その土地にゆかりがあるということです。地元出身の人がUターンして起業するといったケースです。もう一つは、その場所に惹かれてよそから移転してくるケースです。いずれにせよ、その土地に戻ってくることやその土地に来ることにメリットがなければなりません。そのメリットというのは、その土地にしかない何かということでしょう。それは、突きつめれば、その土地がもっている地域文化や、その地域社会のまとまりということに行き着くと思います。そして、それらを大事にするという地道な取り組みが求められることになります。

つまり、第一次産業以外に何らかの産業があればよいということでは、十分でありません。そこで暮らす意味はあるのかということじたいが問われています。すでに述べたように、その地域社会に住むかどうかそれじたいが、選択に委ねられる時代になりました。残るにせよ、移り住んでくるにせよ、それが選択である以上、地域社会に魅力があるかどうかが問われるようになりました。地域の産業も、その地の生活文化に根ざすことが求められています。地域社会の持つ魅力は、そこに住む人たちが地道な取り組みを積み重ねることによってしか生み出されません。しかもこの取り組みは、外部の開発に依存するという発想を捨て、自立という観点で地域社会を考えることが基盤になっています。つまり、自立への意志それじたいが、地域社会に魅力をもたらしているのです。

永井　それぞれの地域社会にとって、いまもっとも必要なことは、自立するという意志を持ち、それを実現しようと工夫することだと思われます。このような取り組みが、その地域社会を魅力あるものとし、この魅力が人を呼び寄せることになります。全国各地で、そのような取り組みがなされています。それらから学びながら、それぞれの仕方で、みずからの地域社会の将来を構想することこそが、地域をもりたてていく鍵になると思います。

永吉 希久子 准教授（行動科学） *Nagayoshi Kikuko*

大阪大学人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了。２０１１年～東北大学在職。社会意識論、差別研究を専門とし、執筆に「シティズンシップ―誰が、なぜ外国人への権利付与に反対するのか―」等。

■永吉希久子准教授の主張点

「対等な地域社会の一員として共に生きる」土台として、移民に対する権利の保障が必要なことは間違いありません。そのうえでなお、「多文化共生」の場として地域は重要だといえます。このことは、宮城県の調査の結果によって、よりはっきりと見えてきました。この調査結果からは、留学生や就労を条件とした在留資格をもつ人よりも、日本人の配偶者や定住者、永住者といった在留資格を持つ人が、日本人とのネットワークを形成できない状況におかれている可能性が示されました。学校や職場でのネットワーク形成が困難な人たちにとって、地域はまさに社会に参加することのできる限られた場です。その一方でこうした人たちは、地域で今後も暮らしていくであろう人たち、地域の担い手となり得る人たちです。彼ら彼女らは、地域社会の構成員として暮らしながら、地域の中で見えなくなっているともいえるのではないでしょうか。地域社会の一員として、協同するにはどうすればよいのか。地域における共生を考えることは、多文化共生の実現において重要なステップだといえるでしょう。

永吉　地域におけるネットワークの存在が大きな意味をもつのは、外国人住民に限ったことではありません。行動科学では、近年、人々の間のネットワークが、経済的・精神的豊かさをもたらす「資源」であると考えられています。地域に豊富なネットワークがあることは、人々の間に信頼を生み、地域の経済成長にも貢献します。特に、職場や学校に所属しない高齢者にとって、地域は貴重なネットワーク形成の場となるのです。

で、本書は、戸島先生以外の5つの論考を否定しているような面もありますし、同時に総括しているような面もある戸島先生の作品を最後に配置するという構成にしたのです。

そのような多面性や総合性を持つのが哲学というものであり、文学研究の総合性ということなのではないかと思っています。

鹿又　これまでに、地域というのは人の繋がり、結びつきの場所だという話もありました。しかし、地域というものを深く考えた場合に、人だけでない何かが重要であって、特に重要視されるのは土地なのかなと思われます。

私は福島県出身です。震災以降、原発の問題があって土地を離れざるを得なかった福島県の人々にとって今、地域社会というものはどうなっているのかと考えると悩ましい気持ちになります。土地があり、歴史というものがあって地域があるのではないかと、改めて問い直しています。

嶋崎　研究対象として選ぶ場合でも、別の場所ではないその場所という意味があることであり、どこでもいいということはないのだと思います。だから、単に人の関係だけではなくて、その場所が持つ意味というのが必ずあるのでしょうね。

戸島　津波被害で壊されてしまったふるさとがあり、その中で、シュンとしてしまう人も大勢いるなかで、少なくない人が立ち上がったわけですね。その土地をふるさととして立ち上がる人々について、私は共通に見受けることができるものとして4つの契機をあげました。「顔つき」「言葉」「情緒」「行動」です。

例えば南三陸で立ち上がった人々と、石巻で立ち上がった人々は、地域性も違うし、生きてきた過程も違うはずなのに、彼らの顔つきには共通しているものがあったり、行動パターンが共通していたり、その言葉から受ける印象が似ていたり、彼らから感じられる情緒が似ていたりします。この4つを通して垣間見えてくるものは何なのだろうか。その人をそうさせるものは何なのだろうかと考えたときに、それはやはりふるさと、古きものの力なのだと思います。その古きものの力は、人間によって花開くのでしょう。

嶋崎　そう考えると、風土というもの、ある共通の場所での生き方というものによって、同じように経験すること、似たような何かを作るという可能性はあるのでしょうね。

鹿又先生は、弥生時代の震災にあった人々と、この東日本大震災を体験した人々に何か共通性があると考えられたわけですよね。

鹿又　そうですね。私は、共感できるものが広がったと思いました。

嶋崎　それは場所の問題なのでしょうか、経験の問題なのでしょうか。

鹿又　場所と経験を別個に考えるのは難しいのかなと思います。

同じ場所にいても、同じように感じられない場合もありますので、経験が一定の役割を果たすのだろうなと思います。同時に、経験だけではないということも感じています。

今回、「地域再考」が一つのテーマになっていたので、地域の果たす役割をもう少し考えていければいいかなと思っていました。地域というものにはいろいろな広さがあり、枠があります。しかし、そこには共通する枠組みのようなものがあるのではないかなと考えています。

嶋崎　私は、それも一つの経験なのかなという気がするんですね。風土というものも経験であると言うのでしょうか。あるいは共通に持つことができる何かと言うのでしょうか。震災のような特別な体験だけでなく、その土地が持つこと、その土地に生きることによって得られる経験もあるのかなという感じですね。

今後へ―どのようなことを伝えたいか

嶋崎　「地域再考」というテーマは、先生方の中で、今後どのように発展させていくものなのでしょうか。一言くらいずつお話しください。

川口　私の場合2つあります。

1つ目は、長いスパンでお付き合いをする、持続的な視野で見続けるということが大事であろうということです。いろいろなものは変わっていきますが、一方では持続するものもあります。だから、例えば被災地に対しても、フィールドワークをしている中国の村落社会に対しても、じっくりと関わり、考え続けなければならないと思っています。

もう1点は、研究は研究者だけのものではないということです。人類学では最近、公共人類学が重要だと言われています。成果を社会に還元するだけではなく、地域の人から様々なことを教えてもらい、学び合い、協力しながら研究と教育をしていくことが大切だと考えています。

齋藤　次へという意味では、2点にわけて考えてみたいと思っています。

1つは非常に専門的なことで、中国思想史という学問の中で論文を書くとしたらどうするか。もっと細かいところに目を向けていこうということです。私は仏教思想が専門です。今回、文章の後半で、禅宗の南宗がどのようにできたのかということに触れましたが、さらに深く考えてみたくて、教理学や哲学だけの問題ではなく、広東出身の宰相、中央官僚のトップにまで上り詰めた人の動きなどに視線を向け、社会全体の変動ということから考えようと思っています。また、中央と辺境との関連の微妙さ、重層性について、たとえば南宗は、実は都の仏教を輸入したという側面もあるのです。このことに関連して、地元の僧侶たちの思惑と、スポンサーになっている地元の官僚たちの思惑がどう関わっているのかということも考えてみたいと思っています。

もう1つは、日本の一般の読者の方に向けて、特に大学生や高校生に向けて文章を書くとしたらどうするか。現代の日本と、私が研究している伝統的な中国という、時代も国も全く違うところが、どのように違うのかということを伝えられるようにしようということです。何が違うのか。例えば中国であれば、地域が広大ですから、当然地域によって自然も文化も全て違うだろうということは、一つの

当たり前の事実だと思います。しかし、日本人が忘れがちなところ、日本人の想像を超えたところとしては、それほど広大な国土であるにも関わらず、日本に比べれば格段に中央集権的な国家権力というものがあり、中央のごく一部の人間が、様々な地域イメージを作ってしまっているということがあります。同時に、主として儒教の古典の世界ということになりますが、現実よりも先にこのような観念が存在してしまっていて、規範になってしまっているということがあります。日本には規範となる儒教の古典やキリスト教圏の聖書といったものがありませんが、そういう文化を持っている人たちは常に、なんらかの規範なり観念を参照しながら現実と向き合っていくわけで、そのような我々の想像を超えた文化をどのようにすればうまく伝えることができるかを考えています。

鹿又　地域再考のためにという限定的なものではないのですが、私は今、これまで一般に行政が担ってきた発掘調査というものに関して、大学の立場からできることは何なのかということを考え直してみようと思っています。

行政が都市開発や地域開発に伴う大規模な発掘をしている中で、大学としては、行政が扱わない（扱えない）ような資料を取り上げていくことで地域を掘り起こすこと、地域を見直すことが一つめの課題です。それによって、今まで知られていなかったものが改めて資料として使われていくことになるというのが大事なことでしょう。

また、目的を持った、そして精度の高いフィールド調査、発掘調査を大学として実践していくというのがもう一つの課題です。

そして、考古学をわかりやすく理解してもらうために情報発信に努力するというのが、3つめのことです。地域を考えていく上で、記憶を蘇らせる役割を担う考古学というのが非常に重要な存在なのに、従来のような堅実な取り組みだけではおそらく一般の方の理解を得ることは難しいでしょう。よりわかりやすく具体的に、歴史的に書いていくということが必要になる、広報的な活動を続けていかなければならないと私は思っています。

戸島　僕も、目下の関心事としては、人間の存在のサイズということについて言語から探りを入れたいなと思っています。

例えばつい先日、セレンゲティというアフリカのライオンの家族を追いかけているイギリスのテレビ番組（同じ群れを9年間追い続けているテレビ番組）で、メスが次々とオスを乗り換えていくことについての日本語ナレーションが「メスは容赦なく、強いオスに乗り換える」と表現していました。これを聞いて僕は、容赦なくという言葉の使い方に引っかかるところがありました。メスは容赦なく強いオスに乗り換えるわけではなく、自然に乗り換えるのではないかと僕は思ったわけです。容赦なくというのはあくまでも人間の世界について言われる言葉であって、セレンゲティにいるライオンたちが自然界の一部として暮らしている中では、メスは自然に強いオスに乗り換えていくわけです。それを容赦なくと書いてしまうライターの、自然というものについての、ある種の無知がにじみ出ているのだと思います。

別の事例になりますが、あるドキュメント番組を見ていたところ、3・11の時の津波を「海が牙をむいた」と表現した人もいれば、「海が伸びをした」と表現した人もいました。二人とも被災地在住の普通のおじさんですが、そういう言い方の中に垣間見える、その人自身の海についての了解というか、無意識的なところでの理解のようなものが、その言葉遣いの中にひょこっと顔を出しているように僕には感じられました。そして、それは海についての理解を超えて、自然全体についての理解であろうし、さらには森羅万象全てについての理解がにじみ出ているのだろうと僕は思うわけです。

僕自身は、圧倒的に「伸び」の方に感動させられます。その方も被災者なのに、それでも海が伸びをしたと言う時、その人の自然理解は、時間のサイズも空間のサイズも桁違いに大きいなという感じがします。

人間の存在のサイズというものは、その人の言葉遣いの中に、なんでもないありきたりの言葉遣いの中に現われてくるのではないでしょうか。その人がどういうサイズの世界を生きた人間なのかということが、自ずと立ち現れるような感じがして、僕は、人間の存在のサイズということと、その人間の語る言葉というものをリンクさせて考えていきたいなと思っているのです。

例えば、お前は何者だ、Who are you?と聞かれた時に、私は・・・と答えるその答えをよくよく眺めてみると、実はその人の存在のサイズがそこに現れるのではないかということです。

嶋崎　最後に、結論づけようとすれば、地域のことを研究していく上で大事なことは、考える心だということだと思います。自分で考え、想像してみるということが何よりも大事であって、そういう想像力が働かないと、発言しても他者には理解できないでしょう。自覚の中身ももちろん必要ですし、だから今、究極的に必要なものは「考える」ことなのではないでしょうか。

宮城県図書館との対話
「東日本大震災文庫」で、震災の記憶を記録に未来へ

県内各地で発行されたチラシなどの資料は、アーカイブ化が予定されています。

図書館共同キャンペーン
震災記録を図書館に

2012年7月、宮城県図書館に「東日本大震災文庫」オープン

宮城県図書館（仙台市泉区紫山）では、2012年7月、「東日本大震災文庫」（3階フロア）がオープンしました。

「震災記録を図書館に」をスローガンとする図書館共同キャンペーンで、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手・宮城・福島3県と、阪神・淡路大震災を経験した兵庫県の公共図書館と大学図書館の連携により、資料を収集、保存することを目指すプロジェクトです。

岩手県立図書館、福島県立図書館、仙台市民図書館、岩手大学図書館、東北大学附属図書館、福島大学附属図書館、神戸大学附属図書館が参加。行政資料（復興計画、生活情報広報、臨時広報など）、非売資料（避難所だより、ボランティアニュース、イベントのチラシなど）、各種出版物（震災関連図書、雑誌の震災特集号、新聞など）、その他（視聴覚資料：DVD・CD等、写真など）など震災関連の多彩な記録が着々と揃ってきています。

■「震災記録を図書館に」共同キャンペーンの概要

地域	参加機関	開設	名称
岩手県	岩手県立図書館	2012年4月	震災関連資料コーナー
	岩手大学図書館	2013年4月	岩手県の自然災害と東日本大震災に関する資料リポジトリ
宮城県	宮城県図書館	2012年7月	東日本大震災文庫
	仙台市民図書館	2012年2月頃	3.11震災文庫
	東北大学附属図書館	2012年3月	震災ライブラリー 震災ライブラリーオンライン版
福島県	福島県立図書館	2012年4月	東日本大震災福島県復興ライブラリー
	福島大学附属図書館	2012年4月	震災関連資料コーナー
兵庫県	神戸大学附属図書館	1995年10月	震災文庫

宮城県図書館の「東日本大震災文庫」には、4233点の図書・雑誌!!

このキャンペーンでは、既に収蔵している資料や、購入しようとしている資料だけでなく、幅広く収集、保存していくため、ホームページなどで県内外の市町村・各種団体・企業・一般市民などに資料提供を呼びかけるというシステムを採っています。

宮城県図書館のホームページでは、左記のように「3月11日　東日本大震災」の記録や資料をご寄贈ください。」と呼びかけたページで、収集したい資料、収集部数(3部希望)、寄贈の方法(持参ないし郵送)を示した上で、「東日本大震災関係送付書」をダウンロード(または出力してFAX)できるようにしています。

この情報を知り、「残してほしい」と資料をお持ちくださる方は少なくないそうです。石巻から、個人で発行している『牡鹿ふるさと通信』を毎号送ってくださる方もいます。県外の医療法人などの団体で、救援活動に携わっていた時の記録をまとめたのでと送ってくださるようなケースもあります。「残してほしい」「活用してほしい」という声が添えられてきます。

しかし、このアピールも地域の奥深いところまで届くことはなかなか難しいものです。個人・各種団体・企業などで作成されている無料配布の資料は、なかなか表に現われてきません。

宮城県図書館の担当者は、それらに目配りするために、情報を聞けばすぐに足を運び、そこからさらに伝手を辿って広げていくといった取り組みを徹底しています。見つけて訪ねて行けば、「探してくれてありがとう」という感謝の言葉をいただき、励まされることもあります。

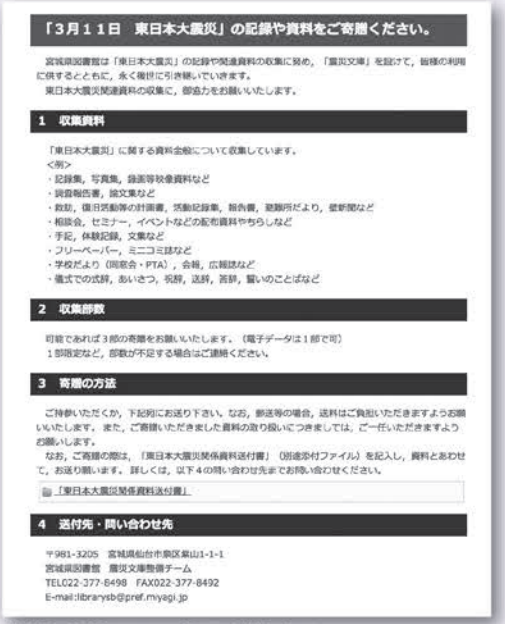
そのようにして入手した資料には、例えば、石巻でたまたま見つけたというフランス語で書かれている『ZOOM JAPON』の特別号「la mission」などがあります。地元の新聞社である石巻日日新聞が震災直後につくった手書きかわら版を紹介しながら、震災時の対応ぶりを特集しており、数少ない海外人がまとめた資料の一点となっています。

そして宮城県図書館では、2014年3月現在、主な資料の収集は以下のような状況となっており、その後さらに2～300点が増えているそうです。これらの中の、記録集、写真集、調査報告書、論文集など、冊子形態となっているものが、震災文庫コーナーの書棚に配置されていて、自由な閲覧が可能になっています(残念ながら、震災文庫収蔵資料は館内閲覧、複写まで、館外貸出用資料は他の書架にあります)。

文庫の存在を広くアピールし、今後、より一層の提供および活用を呼びかけていきたいと、担当する震災文庫整備チーム・田中亮主事(司書)は考えています。

宮城県図書館では、「地震・津波災害、原子力災害の記録・教訓の収集・保存・公開体制の整備を図り、国内外を問わず、誰もがアクセス可能な一元的に活用できる仕組みを構築する」との方針を掲げて政府が進める「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ：ひなぎく」との連携を予定。チラシ・ポスター・写真等は、入手したものからデジタル化し、アーカイブ化することが2014年度から進められています。

例えば発災直後に発行された石巻市「週刊　仮設きずな新聞」、石巻市雄勝地区の「おがつ新聞」、東松島市「ひがしまつしまサポセン通信」、多賀城市「えん+じん」、仙台市若林区「荒浜新聞」、丸森町「住民の皆さまへお知らせ」、宮城大学学生有志「アルパカかわら版」など、貴重な手づくり広報誌は展示されることはもちろん、デジタル・アーカイブにより、世界へ発信される予定になっています。



「3月11日　東日本大震災」の記録や資料をご寄贈ください。

宮城県図書館は「東日本大震災」の記録や関連資料の収集に努め、「震災文庫」を設けて、皆様の利用に供するとともに、永く後世に引き継いでいきます。
東日本大震災関連資料の収集に、御協力をお願いいたします。

1　収集資料

「東日本大震災」に関する資料全般について収集しています。
<例>
・記録集，写真集，録画等映像資料など
・調査報告書，論文集など
・救助，復旧活動等の計画書，活動記録集，報告書，避難所だより，壁新聞など
・相談会，セミナー，イベントなどの配布資料やちらしなど
・手記，体験記録，文集など
・フリーペーパー，ミニコミ誌など
・学校だより（同窓会・PTA），会報，広報誌など
・儀式での式辞，あいさつ，祝辞，送辞，答辞，誓いのことばなど

2　収集部数

可能であれば３部の寄贈をお願いいたします。（電子データは１部で可）
１部限定など，部数が不足する場合はご連絡ください。

3　寄贈の方法

ご持参いただくか，下記宛にお送り下さい。なお，郵送等の場合，送料はご負担いただきますようお願いいたします。また，ご寄贈いただきました資料の取り扱いにつきましては，ご一任いただきますようお願いします。
なお，ご寄贈の際は，「東日本大震災関係資料送付書」（別途添付ファイル）を記入し，資料とあわせて，お送り願います。詳しくは，以下４の問い合わせ先までお問い合わせください。
「東日本大震災関係資料送付書」

4　送付先・問い合わせ先

〒981-3205　宮城県仙台市泉区紫山1-1-1
宮城県図書館　震災文庫整備チーム
TEL022-377-6498　FAX022-377-8492
E-mail:libraryst@pref.miyagi.jp

宮城県図書館ホームページ上の寄贈呼びかけ

石巻で入手したフランス語の情報誌『ZOOM JAPON』

■「東日本大震災文庫」の資料収集状況

収集対象資料

- 「調査報告書」「災害記録」「災害写真集」
- 震災を主な内容とするあらゆる分野（視点）で発表された資料
- 自治体や各種団体が住民や避難者に配布したチラシや広報物
- 特集記事を組んだ雑誌
- 震災翌日からの新聞
- 個人や団体が撮影した発災直後、復旧過程の写真や動画
- 避難所などでの安否確認や生活情報を載せた掲示物
- テレビ・ラジオなどで放送される映像・音声

資料収集状況（2014年３月現在）

図書	2,976冊
雑誌	1,257冊
視聴覚資料	28点 （CD２点：DVD18点）
新聞	27点 （寄贈された関東以西の地方新聞）
チラシ類	2,114点 （チラシ・ポスター・写真等を含む）

「東日本大震災文庫」にある東北大学の記録

東日本大震災以後、東北大学では、全学的な取り組みとして「東北大学災害復興新生研究機構」が設立され、8つのプロジェクトが推進されているほか、各学部・学科・専攻・研究室単位でもさまざまな震災に関する活動や研究が行われています。

文学部・文学研究科・阿部恒之教授がアドバイザーとして参加している東北大学アーカイブプロジェクト「みちのく震録伝（しんろくでん）」は、8つのプロジェクトの中のトッププロジェクトである「災害科学国際研究所（IRIDeS）」の取り組みの一つです。東北大学附属図書館や宮城県図書館の震災文庫と連携も模索しながら、震災関連の資料のアーカイブ化が進められています。

これらの活動を基盤とし、東日本大震災に関して東北大学関係でまとめられたものとしては左記のようなものが把握されますが、宮城県図書館の「東日本大震災文庫」には○印をつけた44点が収蔵され、閲覧、利用に供されています。

色文字のものが文学研究科・文学部関連のものですが、「東日本大震災文庫」には9点が収蔵されています。

今後、みちのく震録伝、東北大学附属図書館、宮城県図書館との連携の輪を強めていくことが期待されるところです。

「東日本大震災文庫」に収蔵されている東北大学関連図書44点

■東北大学関連の東日本大震災に関する発表作（非売品も含む）

※○×印は「東日本大震災文庫」収蔵の有無　※色文字は東北大学文学部・文学研究科関連

2011年

5月■津波の恐怖－三陸津波伝承録－	×
6月■まなびの杜　No.56：震災特別号	○
9月■石巻赤十字病院、気仙沼市立病院、東北大学病院が救った命	○
10月■東日本大震災と方言：東北大学方言学研究センター研究報告書	○
12月■震災川柳	○

2012年

3月■聞き書き　震災体験－東北大学90人が語る3.11	○
3月■東日本大震災復興研究Ⅰ　東日本大震災からの地域経済復興への提言	○
3月■今を生きる－東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言1　人間として	○
3月■建築遺産保存と再生の思考　災害・空間・歴史	○
3月■東北大学工学研究科における東日本大震災の地震研究報告書	○
3月■東日本大震災に関する法律問題の研究	○
3月■震災　宮城・子ども詩集（副読用教材）	○
3月■東日本大震災：対応記録集（東北大学教育・学生支援部）	○
3月■東日本大震災東北大学動物実験施設報告書	○
3月■東北大学医学系研究科・医学部東日本大震災記録集	○
3月■東日本大震災：東北大学病院記録集	○
3月■東日本大震災の記憶（東北大学病院看護部）	○
5月■東北大学復興アクション：「東北復興・日本新生の先導」を目指して	○
6月■東日本大震災と大学教育の使命	○
6月■東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2011年度報告集	○
7月■親を亡くした子どもたちに対する支援の中長期的展望	○
7月■東日本大震災後の子ども支援：震災から1年を振り返って	○
8月■東日本大震災記録集（宮城産科婦人科学会）	○
9月■今を生きる－東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言2　教育と文化	○
10月■方言を救う、方言で救う	○
10月■東北大学復興アクション　第2版「日本復興の先導」を目指して	○
10月■東日本大震災後の東北大学学生相談所の活動	○
10月■東日本大震災における東北大学整形外科関連施設の記録	○
12月■東日本大震災後の子ども支援　第2回：診察室や保健室から見える子ども達	○
12月■ラジオ「カフェ・デ・モンク」	○

2013年

2月■今を生きる　東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言3　法と経済	○
2月■今を生きる　東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言4　医療と福祉	○
2月■今を生きる　東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言5　自然と科学	○
3月■東日本大震災復興研究Ⅱ　東北地域の産業・社会の復興と再生への提言	○
3月■地域発イノベーションⅠ　東北からの挑戦	×
3月■地域発イノベーションⅡ　東北企業の資源発掘・展開・発展	×
3月■みんなの防災手帳	×
3月■東北大学大学院理学研究科・理学部2011年東日本大震災後の記録	○
3月■伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集	○
3月■東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究	○
6月■東日本大震災を分析する1　地震・津波のメカニズムと被害の実態	○
6月■東日本大震災を分析する2　震災と人間・まち・記録	○
6月■被災地から考える日本の選挙：情報活用の可能性を中心に	○
9月■東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集	○
10月■東日本大震災後の子ども支援　第3回：災害を経験した子どもたち	○
10月■3.11から記録と記憶をつないで、次代へ、世界へ：東北大学震災記録集	○

2014年

2月■地域発イノベーションⅢ　震災からの復興・東北の底力	○
3月■「地域」再考－復興の可能性を求めて	×
3月■東日本大震災復興研究Ⅲ　震災復興政策の検証と新産業創出への提言	×
3月■生活を伝える被災地方言会話集	○

「東日本大震災文庫」に収蔵されている東北大学文学研究科・文学部関連図書4点

東北大学文学部の
歴代研究者
メモリアル 9

写真は東北大学史料館「東北大学関係写真データベース」より

英語と日本語の言語の可視映像化にも取り組んだ英文学・比較文学研究者

土居光知博士

Doi Kochi

Profile

高知県出身。1886-1979年。大正～昭和期の日本の英文学、比較文学の発展、確立を担った代表的研究者の一人。1924年に東北帝国大学法文学部教授に就任し、1948年まで在籍。西洋文学第一講座（現在、英文学専攻）を発足、発展させる一方で、1929年に6つの帝国大学が参加して組織された「日本英文学会」の発足に尽力し、1936-37年には二代目会長 に。また文化人類学、比較神話学も加えた視点から、比較文学的に日本文学を考察する研究にも新風をもたらした。

文庫本で読める土居光知訳『ブレイク詩集』

東北帝国大学法文学部西洋文学第一講座を開設した土居光知は、東京帝国大学卒業後イギリス、フランス、イタリアに留学して英文学、比較文学を専攻し、ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）、ジェイムズ・ジョイス（1882-1941）、ウィリアム・ブレイク（1757-1827）、D.H.ロレンス（1885-1930）、オルダス・ハクスリー（1894-1963）等の研究の先がけとなり、それらの作品を翻訳・紹介した研究者です。『シェイクスピア』、『夏の夜の夢』、『ロレンス』、『ブレイク詩集』などの翻訳や編集がありますが、現在、『ブレイク詩集　無心の歌、経験の歌、天国と地獄との結婚』が平凡社ライブラリー（2001年初版第6刷）で気軽に購読できる状態となっています。

実は、この『ブレイク詩集』の訳詩は改造社版での発行が1950年であり、その直後に作品の一部が中学校の国語の教科書に引用されていました（『教科書掲載作品　小中学校編』らよる）。「こだまする野べ」（秀英社・52年版中学国語／富山出版・51年版中学国語）と「笑いの歌」（光村書店・52年版中学国語・55年版中学国語）です。

原文と対照しながら土居訳を味わってみましょう（原文は松島正一編『対訳　ブレイク詩集』より借用）。

こだまする野べ

日は　のぼり、
空は　うららか。
こころ　うきたつ　鐘は鳴り
春を迎える。
空の　ひばり、
やぶの　つぐみ、
森の　小鳥。
快い　鐘のひびきにつれ、
声はりあげてうたい、
こだまする野べに　はずむ
子供らの　あそび。

The Echoing Green

The Sun does arise,
And make happy the skies.
The merry bells ring,
To welcome the Spring.
The sky-lark and thrush,
The birds of the bush,
Sing louder around,
To the bell's chearful sound.
While our sports shall be seen
On the Echoing Green.

笑いの歌

みどりの森　喜びの声あげて笑い
えくぼする水　えみひろがって流れ
風　われらの　たわむれごとを笑い
みどりの岡　やまびこをかえすとき

きりぎりす　楽しいけしきのなかで　うたい
牧場はしたたるような　みどりのえまい
メアリとスザンとエミリ
かわいい　まるい口でうたう　ハッ　ハッ　ヒィ

羽美しい　いろ鳥は　木の間で笑い
木陰の　食卓にはさくらんぼやくるみ
さあ　おいで　みんな　いっしょに
楽しい合唱をしよう　ハッ　ハッ　ヒィ

Laughing　Song

When the green woods laugh with the voice of joy
And the dimpling stream runs laughing by,
When the air does laugh with our merry wit,
And the green hill laughs with the noise of it.

When the meadows laugh with lively green
And the grasshopper laughs in the merry scene,
When Mary and Susan and Emily,
With their sweet round mouths sing Ha,Ha,He.

When the painted birds laugh in the shade
Where our table with cherries and nuts is spread
Come live & be merry and join with me,
To sing the sweet chorus of Ha,Ha,He.

全5巻にまとめられた『土居光知著作集』は、第一巻「英文学の感覚」、第二巻「古代伝説と文学」、第三巻「文学と伝説の伝播・交流」、第四巻「言葉とリズム」、第五巻「文学序説」というラインナップになっています。

東北大学文学部の 歴代研究者メモリアル 9

1935年・36年、全100巻・別冊3巻の『研究社英米文学者評伝叢書』において土井は、『6　シェイクスピア』と『87　ロレンス』を担当しています。

日本の英文学研究の歴史の中で

日本人が初めてイギリス文化に接触したのは、江戸時代初期、徳川家康がウィリアム・アダムズ(三浦按針)を召し抱えたときといわれます。しかし、本当の意味で英語・英文学が学ばれるようになったのは明治に入ってからのことであり、明治時代の最初の10年間はジョン・ステュアート・ミル(1806-1873)、ジェレミー・ベンサム(1748-1832)、ハーバート・スペンサー(1820-1903)などの政治・哲学思想やプロテスタントなどのキリスト教が新しい時代を刺激しました。20年代になると坪内逍遥の『小説神髄』やシェークスピアの翻訳でイギリス文学が広まり、国木田独歩・北村透谷・島崎藤村・土井晩翠などはロマン派詩人からの影響を受け、夏目漱石はジョナサン・スウィフト(1667-1745)、ローレンス・スターン(1713-1768)など18世紀文学とジョージ・メレディス(1828-1909)などから影響を受けました(小学館『百科事典』より)。

土居光知の英文学研究の学術的な取り組みは、文学活動と研究活動の違いはありますが、それらの明治期の活動に続く、大正・昭和期の大きな成果と括ることができるでしょう。

土居光知の研究成果は数多くの著作、翻訳、編集、監修本として発表され、仙台・宮城県では東北大学附属図書館・仙台市民図書館・宮城県図書館等で見ることができます。

東北大学附属図書館には、英文学者の原典を土居が編集・解説した作品としてMatthew Arnold(1822-1888)の*Culture and Anarchy*、*Essays in criticism*、Perey Bysshe Shelley(1792-1822)の*Prometheus Unbound*、Thomas Carlyle(1795-1881)の*Sartor Resartus*、*Select poems of Percy Bysshe Shelley*なども揃っています。

1967年、土居は、仙台の書店兼出版社であった宝文堂から発行された『仙台あ・ら・かると』に記した「仙台の思い出」の中で、自身の英文学研究の姿勢について触れています。英文学研究、比較文学研究、そして日本文学研究へと進んだ土居のスタンスを知る手がかりとして、左に長めに引用してみましょう。

岩波書店における最初の『英和辞典』の編集

これらの成果品の中でも特に注目される一書は、1936年発行・1951年新増訂、島村盛助(1884-1952)・田中菊雄(1893-1975)との共著『岩波英和辞典』です。

英和辞典に関するネット情報によれば、1813年にオランダ通詞・本木庄左衛門が編集した『暗厄利亜(あんげりあ)語林大成』か、1862年頃にオランダ通詞・堀達之助が表した『英和対訳袖珍辞書』(*A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language*)が、日本における英和辞典の最初であるともいわれます。明治以後、金港堂、大倉書店、三省堂などの英和辞典が発行され、昭和に入って土居等による岩波英和辞典が続きました。

岩波書店の英和辞典としては最初のものだと思われる1936年版の前書である「本辞典編纂に就いて」において土居は、英文学研究の本質的な立場から見たとき、これまでの英和辞典にはいかに基本

英語は日本人にとっては相当困難な国語であって、話し、書き、かつ読むことを自由にすることが、大学三年の課程でも十分とはいえませんが、これは元来は大学本科以前の仕事であります。そして大学でこれを遂行しようとすると、英文科を他の文学科から引き離し、また文壇から時代おくれにします。

当時日本の大学に来任した、ホジソンやブランデンは、シェリ、キーツのような英国詩人の伝統を継承するすぐれた詩人であって、学生や私らを英詩の鑑賞に導いてくれました。しかし日本人は英詩を作れるようにはなれません。英詩を学んで、日本の新体詩、象徴詩を創作した明治の先輩学者の歩んだ道は、大震災があり、社会主義、マルクス主義がさかんになった、けわしい時代には追従することができません。この時において、学生を創作または、ジャアナリズムの評論に誘導する、てっとりばやい道は、同時代の進歩的な文学—この時代ではジョイス、ロレンス、エリオットらの文学—の紹介にあると考えました。しかし、英文学の教養を身につけずして、それに反抗する文学をすすめると、バランスのとれない、反省や批判の欠けた、文学に心を奪われ、若やかな心を荒地にするかもしれないと心配しました。

右にあげたようなことが、その後の四十年間の、日本の英文科の教師及び学生が出合ったディレンマであります。それは今日においてもディレンマとして残されています。

夏目漱石は、このディレンマを克服した先輩でありました。彼は英文学を研究することによって鋭敏にされた眼識をもって日本の文芸を再評価し、新しい創作の手法と境地を開拓しました。そして文学科創立に際し、仙台に来任した、阿部(次郎)、小宮(豊隆)教授らは漱石の感化を受けた少壮学者であって、日本文芸についても、深い教養と、新鮮な識見をもち、その影響を学生に与えつつありました。私らは考えました。日本人としては、英文学の全体を遺産として相続し、深い教養をもつ学者となることは不可能であるが、英文学の重要な一時代または、一局面に通じ、それと相似点をもつ日本文学の教養をもち、その双方の比較研究を通じて、文学の特色ある個性的な理解、また創造に達するかもしれないと。(後略)

英語歳時記

英和辞典

『仙台あ・ら・かると—創造と回送の文芸手帖—』の編集者である「Qの会」は、1945年に土居光知を会長として結成された東北文芸協会から発展した、仙台在住文学者の談話会です。土居は仙台を離れた後も名誉会長を務めていました。

的な欠点があったかを指摘し次のように記しています。

英和辞書を開いてsubjectといふ語の解説を見ると、'支配を受ける'、'従属する'、条件として'、臣民'、'問題'、'主格'、'患者'の如き三四十の訳語が附せられてあり、objectを見ると、'物体'、'風物'、'対象'、'目的物'、'賓辞'、'反対する'、'邪魔をする'等やはり二三十の訳語が附してある。学生はこれらの訳語のうちから理解せんとつとめてゐる英文の前後のつじつまが合ふやうな訳語をさがし出して、その文章を理解し終ったとする。かくしてsubjectが'従属する'、objectが'目的物'の如き意味になることは記憶するが、subject、objectは本来いかなる意味を有する語であるかは知る由なく、そのために見当違ひの訳をし、応用はきかず、同一の語を幾回でも辞書で引く労をとらねばならぬ。ある辞書には語原の説明が添へられてあるが、subject=sub[under]+jacere[to throw]、object=thing thrown beforeとあるのを見ても、これによってそれぞれの語義の発達を理解する学生は十人中一人もないであらう。我国の中学生に対し、在来のやうな仕方で語原を附することは単に申しわけ的であり、更に難解の一物を添へることであった。

この反省の上に立って、土居たちは新しい英和辞典編集を作り上げたのです。

『英語歳時記』全6巻の監修、執筆

もう一つの注目作品は、福原麟太郎(1894-1981)、山本健吉(1907-1988)との共同監修及び執筆でまとめた、研究社発行『英語歳時記』(春・夏・秋・冬・雑・別巻)6冊です。編者・成田成寿(1907-1986)は、春編の前書「はじめに」において、〈イギリス、アメリカ文学でも花鳥風月に対する言及が多く、生活と結びついた行事がある。イギリス、アメリカ文学について歳時記的なものができないかと考えたのが本書の発想であった。〉と編集趣旨について書き出した上で、〈本書が出版されるにいたるまでには監修の土居光知、福原麟太郎、山本健吉の三先生の一方ならぬご苦労をいただいた。まず、方針の確立から項目や執筆者の選定をしていただき、さらに執筆に加っていただき、校正の段階でもいろいろご注意を賜った。〉と記しています。

これに対応して土居は、秋編の「秋の季節」に「イギリスの秋」、別巻の「四季のエッセイ」に「イギリスの風土」を寄稿。「イギリスの秋」の冒頭で土居は、

イギリスでは14世紀ごろまで、1年をsummerとwinterの二季に分けていた。spring(春)は16世紀から、autumn(秋)はChaucerから用いられた。イギリス固有の秋という語は、harvestとfallで、北方地方では今でもこの語を用いている。Harvestは収穫のとき、fallは落葉のときであるが、イギリス、またアメリカ東北部では、北海道におけるごとく、紅、黄葉の時期が短かく、霧が降りると、数日のうちに落葉してしまうので、紅葉を観賞する暇もなく、fallという語がよくその感じをあらわしている。

と記し、また「イギリスの風土」では、ジョン・ゴールズワジー(1867-1933)の『近代喜劇』(*A Modern Comedy*)を取り上げてイギリスの風土、特に季節に関する句を拾った上で、

だれかが季節感は日本文学の中で最も微妙に発達していて、イギリス人にはわかりそうにもないといったが、こうして注意してみるとイギリス人の季節感も侮りがたいところがあるように思われる。

と記し、英文学研究、比較文化研究を積み重ねてきたことによる広範な関心と該博な知識とを披瀝しています。

■土居光知の著作・翻訳・監修等作品の図書館収蔵状況

(東北は東北大学附属図書館、仙台は仙台市民図書館、宮城は宮城県図書館の所蔵)

文学序説	1922年・1927年・1949年(東北・宮城)
古代伝説の比較研究	1932年(東北)
文学論	1933年(東北)
基礎日本語	1933年・1934年(東北)
英文学の感覚	1935年(東北)
シェイクスピア	1935年・1980年(東北)
ロレンス	1936年(東北)
岩波英和辞典(共著)	1936年・1951年(東北)
英文学研究方法論	1940年(東北)
夏の夜の夢	1940年・67年(東北・宮城)
日本語の姿	1943年(東北)
ブレイク詩集(改造社版)	1950年(宮城)
ロレンス：人と作品	1954年(東北)
日本音声の実験的研究	1955年(東北)
古代伝説と文学	1960年(東北・宮城)
文学の伝統と交流	1964年(東北・宮城)
無意識の世界(共著)	1966年(東北・宮城)
英語歳時記(編集・執筆)春	1968-70年(東北・宮城)
英語歳時記(編集・執筆)夏	1968-70年(東北・宮城)
英語歳時記(編集・執筆)秋	1968-70年(東北・宮城)
英語歳時記(編集・執筆)冬	1968-70年(東北・宮城)
英語歳時記(編集・執筆)雑	1968-70年(東北・宮城)
英語歳時記(編集・執筆)別巻	1968-70年(東北・宮城)
言葉と音律	1970年(東北・宮城)
神話・伝説の研究	1973年(東北・宮城)
東西文化の流れ(対話集)	1973年(東北)
文芸その折り折り	1973年(東北)
言葉とリズム	1977年(東北)
日本文学研究の方法	1977年(宮城)
土居光知著作集　第1巻	1977年(東北・仙台)
土居光知著作集　第2巻	1977年(東北・仙台)
土居光知著作集　第3巻	1977年(東北・仙台)
土居光知著作集　第4巻	1997年(東北・仙台)
土居光知著作集　第5巻	1997年(東北・仙台)
ブレイク詩集	1995年(東北・仙台)

私は一九二二年に出版した『文学序説』の一章で「詩形論」を発表し、一九四三年に出版した『日本語の姿』の中で、「日本語の調子」、「五七調と七五調」の二章を書いたが、今回『言葉と音律』と題する一書を出版するにあたり、前書を補足し、かしこで現象として取扱ったものを、ここでは民族の意識の中にひそむ原型の顕現として取扱おうと思った。そして、それを幾分か可能にすることができたのは、東北大学附置電気通信研究所において、電磁オッシログラフを使用し、音声を可視映像にし、音声の強弱、高低、長短、緩急などを明確に捕捉し、音声と時間との関係を観察することをえたことによるのである。それらの実験をするにあたっては、当時の電気通信研究所の永井健三博士、佐藤利三郎博士、佐藤利雄博士、岩崎俊一博士その他多数の共同研究者の懇切な指導および援助に負うところが多かった。またこの研究所において、舘山甲午氏に平曲を語ってもらい、録音していたとき、『平家物語』の文体がところどころ七五音四音歩律であるとともに、素声、口説などが、ホメーロス叙事詩の調子を想起せしめる、六音歩律であることに気付いたのは大きい驚きであった。私はこの経験を出発点として、『竹取物語』から『源氏物語』に至る平安朝物語の音律的展開および、明治時代の新体詩の自由詩形から散文詩になったまでの、音律的変化をたどってみた。この二章を読まれるかたは、その前に、「平家物語の文体」を読んでいただきたい。

この本の横書きの部分は音声の時間に関する実験を主としたもので、明治以後における日本人の話し方の速度の変遷、東京と京都における音声の特徴、英詩の音律的構成等々の問題を考察した。音律の単位となるものは音歩、等時性音群などであるので、私はこれらを時間の角度から音歩および音群の本質を明かにせんとした。

東北大学附置電気通信研究所の力を借りて音声を可視映像化する試みにもチャレンジ

もう一つの注目すべき取り組みは、音律（リズム）についての研究でしょう。

土居は、1970年に発行した『言葉と音律』の「まえがき」において、左のように記述しています。

同様の記述は、1977年に発行された『言葉とリズム』（『著作集』第四巻所収）にも見られます。1933年に法文学部心理学実験教室に写声機械が備えられたので、夏休みを使って実験をさせてもらい、『東北大学法文学部十周年記念論文集』に論文を公表したと記されています。『言葉とリズム』の「はしがき」には、

句読点は文章句節の文法的関係を示すものとされているが、また律動的な読み方を暗示する働きをする。シェイクスピア劇の句読点、平家物語の知きかたりものの句読点などはその例であって句読点に注意せざれば、これらの劇詩や物語を味わうには不十分であろう。私は岩波文庫の『夏の夜の夢』を訳したとき時間的句読点に注意すべきことを感じ、「句読点について」の一章（ト書きと句読点に就いて）を書いた。

という一文が見られます。電気通信研究所との連携は東北大学だからこそできたことであると同時に、先進的な研究姿勢を貫いた土居光知らしい行動と言えるでしょう。

なお、『言葉と音律』の「まえがき」で土居は、「スコットランドのトマス・ライマアの歌と浦島子の歌とは、歌形のみならず、内容までも相似の点があり、さらに、この相似の理由を探求する価値がありそうである。しかし、それは言葉の表面から比較研究することは不可能で、古代農耕民族が、豊穣を司る女神と美男子との婚姻を祝い、歌舞演技したような経験が、集合的無意識の底に沈んでいて、それが折りにふれて、ムードとなり、旋律となって意識の表面に浮かび出で、同型の詩歌を生成したとでも空想するよりほかはない。この消息は音律学の取り扱い得ないところである。もし私に、古代伝説に関し、さらに一巻の本を出版する機会がめぐまれるとすれば、この問題を探索してみたいと思う。」と締め括っており、比較文学へと進んでいった背景も理解させるものとなっています。その成果は、1973年発行の『神話・伝説の研究』となって結実しています。

『夏の夜の夢』の表紙

『言葉と音律』の大扉と目次

文学部の研究紹介 9

3.11東日本大震災以後の“災害文化”研究への深化

心理学
阿部 恒之教授
Abe Tsuneyuki

Profile

新潟県生まれ。1985年、東北大学文学部（哲学科心理学専攻）卒業、(株)資生堂入社。2001年、ビューティーサイエンス研究所主任研究員として、東北大学文学研究科博士後期課程（行動科学専攻・心理学分野）修了。2005年より東北大学在籍となり、現職へ。『ストレスの仕組みと積極的対応』(1991年)、『化粧心理学』(1993年)、『化粧行動の社会心理学』(2001年)、『対人心理学の視点』(2002年)、『心理学の視点20』(2007年)、『ストレスと化粧の社会心理学』(2012年第5刷)、『心理学の視点24』(2012年)等、執筆・共同編集・著書多数。現在、東北大学附置研究所である災害科学国際研究所（IRIDeS）において、「生きる力」特定プロジェクトのメンバーとして、東日本大震災アーカイブプロジェクト「みちのく震録伝（しんろくでん）」のアドバイザーとして、東日本大震災以後の防災・減災分野での研究にも取り組んでいる。

3.11東日本大震災直後の緊急報告会

東北大学においては、2007年に設置された「東北大学防災科学研究拠点」が災害科学についての研究拠点となって宮城県沖地震を基礎に据えての記録収集・検証・研究などに取り組み、阿部恒之教授は災害心理学の視点から関わってきました。

この研究拠点では、2011年3月11日の東日本大震災発災と同時に東日本大震災で起こったことを対象とする研究へと進み、2011年中には1ヵ月、3ヵ月、6ヵ月の報告会を開催するなど、その取り組みを強めました。2012年4月には「災害科学国際研究所（IRIDeS）」の名称で東北大学附置研究所へと改組、改称しています。

阿部教授も、震災直後から自らが大学キャンパスや仙台市内で経験したこと、教員・学生が経験したこと、大学生・一般市民に調査したことなどを材料として、3回にわたって発表を行っています。

その内容は、とにかく記録を残すことを優先するもので、

・学生の安否確認をしながら街中を撮影
・河北新報社の協力を得て、日記・写真などを募集（2011年5月5日記事）
・新聞や雑誌記事の収集、テレビ番組の録画
・授業や市民講座で特異体験を収集

といった活動でした。

この結果、新聞募集では91名から日記・写真などの記録の提供があり、授業や市民講座での大学生・一般市民への調査では、2011年5月～6月の期間、福島学院大学（14名）・宮城学院女子大学（39名）・東北大学（90名）の学生と、丸森町齋理蔵の市民講座の聴講生（18名）計161名に対して**「震災時、ふだんと違うと感じた体験を教えてください」**との質問を行い、計514個の回答を得ました。

報告会での報告内容は、概略以下表1のようにまとめることができます。

表1■東北大学防災科学研究拠点の東日本大震災報告会における阿部恒之教授の発表概要

報告会	阿部教授の発表概要
① 東日本大震災1ヵ月後緊急報告会 2011年4月14日	**被災者のマナー　被災後の生活と治安** 東日本大震災時に地域住民がどのように対応したか。阪神・淡路大震災、中越大震災のときと同様に、被災者の秩序ある行動、助け合う姿はが海外から称賛された。「きちんと並ぶ節度」「自発的な助け合い」「パニックが発生しない」など「穏やかな避難生活、二次被害の最小化」において海外の災害時と対比的である。 しかし実際には、掠奪・パニック・デマによる被害は無縁とはいえない状況にあることも分かった。 震災後の暮らしの安全を守るためには混乱行動を生じる条件・生じない条件を明らかにし、その「分水嶺」を見極める必要があると考え、まずはきちんとした記録を残すことから開始することが必要であることを報告し、学生と共に調査を開始した。
② 東日本大震災3ヵ月後緊急報告会 2011年6月15日	**被災者のマナー2　被災時の混乱と助け合い** 「大震災以降1か月間の県内の犯罪情勢①」として、<●刑法犯の発生件数:前年期同期比249件減の1554件（1割以上の大幅減）。●重要犯罪（殺人や強盗等）:7件減の8件●重要窃盗犯（侵入盗等）:88件増の341件（震災発生から10日間に約9割が集中）。●閉店中の食料品店などを狙った「出店荒らし」:前年同期比87件増の124件。●自転車盗:前年同期比3倍以上の45件。（宮城県発表／4.26読売新聞）>を報告した。 また、「大震災以降1か月間の県内の犯罪情勢②」として<東日本大震災で被災し、無人になった民家や店舗を狙った窃盗事件が震災後1か月間で34件（被害総額約1200万円）。摘発された事例はない。●無人の店舗を狙う「出店荒らし」:12件。●避難で無人になった民間の「空き巣」:6件。●津波などで放置された乗用車の「車上狙い」:4件。●作業員が避難して無人になった工事現場から建設資材が盗まれた。
③ 東日本大震災6ヵ月後報告会 2011年9月14日	**被災者のマナー3　被災者は何を見たか・感じたか** 被災直後の様子を確認するため、宮城県の大学生・市民講座の聴講生161名に「震災時、ふだんと違うと感じた体験を教えて下さい」の質問調査を行った。 514の回答を得、ライフライン、社会的変化、逸脱行動と望ましい行動、心身の変化等に分類してまとめた結果、逸脱行動と望ましい行動に関してはく逸脱行動があった55件:買い占め18、マナー違反12、盗み10、電気泥棒8、喧嘩・乱暴7etc.。利他行為・秩序維持行動があった162件:コミュニケーション拡大58、助け合い41、冷静な対応36、分かち合い27etc.>という結果となったことを報告した。

「東日本大震災で体験したこと、感じたこと、考えたこと」（2012年3月）での発信

(1) 体験の発信

仙台において被災者の目に留まり、記憶に残ったことの多くは、助け合い、いたわり合う人々の姿でした。犯罪やそれに近いことが皆無だったわけではありませんが、他者を押しのけて我先にという殺伐とした状況はほとんどなかったと阿部教授には思われました。

それに対して、これまでマスコミを通じて見聞してきた海外の被災者像は、被災者同士が争い、奪い合うような凄惨なものです。いわば被災者が被災者を苦しめる二次被害があたりまえのような状況です。また日本でも、過去には、関東大震災時にデマが流れ、在日朝鮮人が日本人によって襲われたとの記録があるように、少し時代をさかのぼれば日本も海外と同じような状況でした。

阿部教授は、「災害時にパニックや掠奪の多発する海外や過去の日本」、「そういう二次被害のない平穏な平成日本」という単純な対比を考えていました。

しかし、そうではなさそうだ。阿部教授には、震災後に起こった、放射線汚染に感情的に反応した京都の送り火騒動、全国の市町村で起こった瓦礫受け入れ拒否や買い控えなどの生々しい利害対立の事例から、「二次被害のない日本」「助け合う日本」という捉え方への疑念が生まれていました。

京都の送り火騒動は、もともとは、京都で恒例の盆の送り火に使う松材を、津波で倒された岩手県陸前高田市の松を使うことで被災地支援の一環としようという善意から始まったものでした。陸前高田市がそれに応えて松を送ったところ、送り火を行う五山の一つが放射線汚染への懸念から拒否。改めて測定したところ微量の放射線が検出されたため使用されなかった、というものです。取り止めにしなければならないほどの放射線量ではなかったのですが、中止されたことによって話題になり、風評被害を助長する結果となりました。

被害の甚大な被災地では、本当のところ、どのような状況であったのだろうか。そのような視点から阿部教授は、岩手・宮城・福島の沿岸被災地の人々の生の記憶や記録こそ次世代に残すべきものであると決断。2011年11月、学外者の協力も得て、3名の研究スタッフとともに釜石市、山田町、気仙沼市、石巻市、いわき市、福島市の被災地において訪問調査を実施したのです（11月23日～翌年1月20日）。瓦礫の山が見え、修理が済んでぴかぴかの家の隣に倒壊した家屋が残るような地域を走り、工事関係者でいっぱいになった2階の壁まで津波の痕跡が残るような宿に泊まり、復興屋台村のプレハブの飲食店で夕食をとったりしての調査でした。

阿部教授は、2012年3月、「東日本大震災から明日へ！復興と再生への提言」と謳った**『今を生きる　1　人間として』**（東北大学出版会発行）において**「第5章　東日本大震災で体験したこと、感じたこと、考えたこと」**を執筆。この調査について、

> **基本的には一箇所お一人、場所によっては数人のグループからお話をうかがったわけであるが、どなたも落ち着いて震災当時を振り返っていたことが印象的であった。津波と競争したかたも、お子さんが見つかるまで不安な時間を過ごしたかたも、逃げ延びたお寺から追い返されて寒い夜道を歩かされたかたも、みな淡々とお話しになった。苦労話よりも日本全国や世界から寄せられた支援への感謝が先にたつ、そんなかたもいた。**

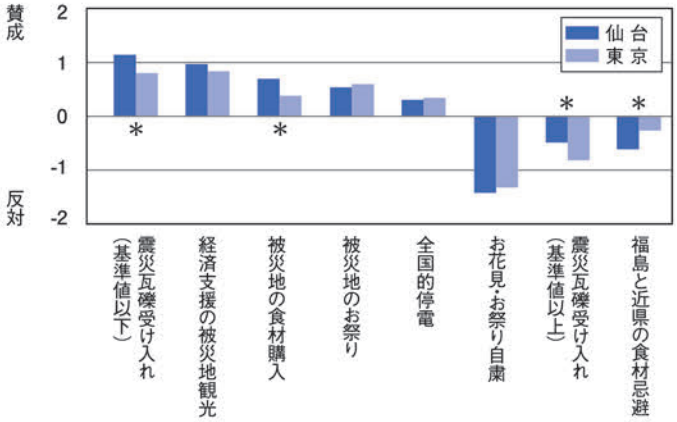
と記しています。

(2) 学生対象の調査、「復興の狼煙ポスタープロジェクト」との交流

この間、阿部教授は、仙台・東京の学生に対して、瓦礫受け入れ、お祭りの自粛など、震災に関連した行為に対する賛否を尋ねる調査も行っています。反対を-2、賛成+2、どちらでもないを0とした時の反応をまとめた結果は、仙台225名（男子63・女子162）、東京77名（男子17・女子60）から回答を得て、下図1のような状況でした。

『今を生きる　1　人間として』の上記論文に公表していますが、仙台と東京の学生では「瓦礫受け入れ（基準値以下）」、「被災地の食材購入」、「福島県と近県の食材忌避」の項目において差があり、仙台の学生は被災地に肩入れしていることが反映されているように見えました。被災地は瓦礫を片付けたい、周囲の地域では瓦礫を受け入れたくないという図式が垣間見えているのではないか、と阿部教授は記しています。

図1 ■災害関連行動に対する賛否（仙台と東京の比較）



一方で、阿部教授には、強く心を捉えられた「復興の狼煙」ポスタープロジェクトという地域の活動がありました。盛岡の広告マンたちが被災地で暮らす人々を撮影し、簡単なメッセージを添えてポスターにして販売し、その金額を被災地に還元するという取り組みです。一見して心をわしづかみにされた阿部教授は、自分が参加した国際学会の会場で貼り出してもらったり、東北大学附属図書館で展示会を開いてもらったりするなど、応援できることに着手。11月に行った被災地訪問調査では盛岡を訪ね、支援の気持ちを表しました。『今を生きる1　人間として』の論稿では、このプロジェクトにも1項をさいています。

R.ソルニットの著作

(3) “災害ユートピア”という視点

実はこの当時、阿部教授の手もとには、2010年12月に邦訳されたR.ソルニットの『**災害ユートピア**』(A paradise built in hell／亜紀書房)の原書がありました。

ソルニットは本書において、アメリカ大陸の事例に限定されているとはいえ、サンフランシスコ地震(1906年)、ハリファックス大爆発(1917年)、メキシコシティ大地震(1985年)、9・11同時多発テロ(2001年)、ハリケーンカトリーナ(2005年)を例にとって大災害時における人々の行動を分析、検証。被災地において、略奪や暴力が支配した場所からわずかに離れた場所に、見ず知らずの人にも声をかけ、いたわりあう、理想郷のようなコミュニティーが形成されることを調べあげ、「災害ユートピア」として描きだしています。

『今を生きる　1　人間として』(東北大学出版会発行)の「第5章　東日本大震災で体験したこと、感じたこと、考えたこと」において、阿部教授は、ソルニットにふれて以下のように記しています。

災害でパニックを起こし、他人を押しのけながらわれ先に逃げ惑う群集は、映画などでも繰り返し描かれてきたところである。しかしソルニット(二〇〇一)によれば、こういう被災者像はフィクションである。様々な事例や研究結果からは、「利他主義と相互扶助方向に向かう多数派と、冷酷さと私利優先がしばしば二次被害を引き起こす少数派」というのが実態だという。そして過去の大災害において、被害者同士が助け合う穏やかなコミュニティーが自然発生した事例をいくつも挙げている。一九〇六年のサンフランシスコ地震を体験し、多くの体験談を聴取した心理学の大家、ウィリアム・ジェームズが、「カオスの中から素早く即時対応的に秩序が生まれたこと」、「全般的な沈着冷静さ」に感動したことも伝えている。

「東日本大震災における助け合いと犯罪」論稿(2014年3月)への到達

(1) 調査を拡大

前述した報告会への報告をまとめる中で、阿部教授には気になることがありました。ガラス壁面を新聞紙やビニールシートで覆った多くのコンビニエンスストアの写真です。なぜ覆っているのか。店長に尋ねたところ、「店内に品物があるのを見られると襲われるかもしれない。それが心配だ」との答え。津波被害のあった仙台北方の沿岸では、実際に盗難被害があったのでベニヤ板で覆っているという店もありました。

そこで、阿部教授は、2011年9月23日～10月14日には岩手・宮城・福島の被災地のコンビニエンスストアを対象として震災直後の様子についての聞き取り調査も実施し、211の店舗から回答を得ました(コンビニエンス調査A)。その後、2012年2月29日～3月15日には山形・秋田のコンビニエンスへの聞き取りも行い、75店舗から回答を得ています(コンビニエンス調査B)。

そして、2013年3月に発行された『**大災害と犯罪**』(法律文化社)の中で「**東日本大震災における助け合いと犯罪**」を執筆。本多明生氏(東北大学附置電気通信研究所研究支援者(当時))、J・ウィワッタナーパンツォン氏(文学研究科・心理学講座大学院生)と共同で最初の調査結果をまとめ直した(表2・図2)上で、警察庁のデータ(仙台市内の治安情勢・前年との比較等)やコンビニエンスストアの調査結果(A：表3・4)も加えて発表しました。

2011年5月、河北新報社の協力を得て、震災後の日記や写真などを募集。集まった写真の中には、盗電して携帯電話に充電している姿(左・中)やゴミ箱をバリケードのように置いたコンビニエンスストア(右)などが見られます。『Dark,cold,and hungry,but full of mutural trust:Manners among the 2011 Great East Japan Earthquake victims』論文より 転載。

論文では、「被災時の特異体験調査」の項で、「逸脱行動」と「利他行為・秩序維持」の具体例を示し、「利他行為・秩序維持」としては「コミュニケーション拡大」「助け合い」「冷静な対応」「分かち合い」などがあったこと、「逸脱行動」としては「電気泥棒」「盗み」「喧嘩・乱暴」などがあったことを記述した上で、

見ず知らず同士が声を掛け合い、助け合う状況が支配的であったことは間違いないが、被災生活は犯罪とはまったく無縁というわけではなかったのである。確かに犯罪は行われていたのである。

とまとめ、さらに「コンビニエンスストアの目隠し」の項で、

特筆すべきは、石巻、塩釜・多賀城市、仙台・宮城野区で、「実際の盗難」が目隠しの理由として挙げられていることである。（中略）報道でこそ見かけなかったが、被災体験の調査にあったように、コンビニエンスストアでの掠奪は実際に存在したのである。これらの地域はいずれも津波による激甚被害にみまわれたところであり、もしかしたら緊急避難的な、やむにやまれぬ事情があったかもしれない。しかし、被害が激甚であっても盗難被害がなかったところもある。この違いは何がもたらしたのだろうか。

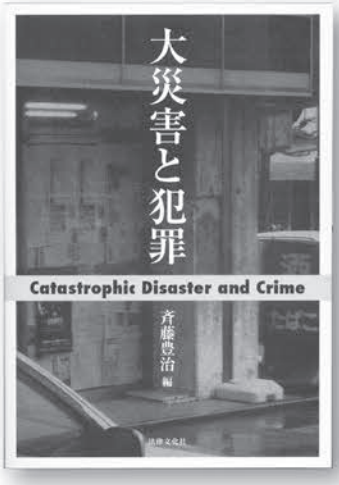
と記しています。そして「むすびに」の項で、

表2 ■災害時の特異体験の分類
（Categories of odd scenes or behaviors in aftermath observed by participants）

ライフライン Essential Utilities	126	電気　Electricity	22
		ガス　Gas	4
		水道　Water	7
		ガソリン　Fuel	35
		電話　Telephone	3
		食料品・水　Food and drinking water	41
		交通　Transportation	14
社会の変化 Social Change	254	普段見かけない人々の出現 Appearance of people in the past	4
		人々の服装の変化　Clothing	10
		異常風景　Landscape	50
		異常事態の中にある日常風景 Found ordinary scene even in emergency	12
		自然への注目　Awareness of nature problem	6
		略奪懸念　Concerns of looting	22
		デマ出現　Rumor	9
		路上販売　On-street selling	5
		メディアの変化　Change in media	23
		物不足　Supply shortage	20
		行列　Queuing	82
		原発　Nuclear plant	11
逸脱行動 Deviant behavior	75	マナー違反　Ill-mannered	12
		路上駐車　On-street parking	1
		えこひいき販売　Favoritism sale	4
		便乗値上げ　Ptice gouging	2
		電気泥棒　Electricity theft	8
		盗み　Thefts	10
		差別　Prejudice	1
		喧嘩・乱暴　Quarrel	7
		反自粛　Self-decontrolled	1
		過剰反応　Overreaction	6
		割り込み　Cutting the queue	5
		買い占め　Buying up goods	18
利他行為・秩序維持 Altruistic or orderly behavior	202	冷静な対応　Calm attitude	36
		コミュニケーション拡大　Strengthen of Communication	58
		コミュニケーション復活　Revival of Communication	9
		募金　Donation	5
		思いやり販売　Price reducing	15
		助け合い　Mutual aid	41
		分かち合い　Sharing	27
		自粛　Self-control	11
感覚知覚変化 Change in perceptions	22	鈍磨化　More blunted	8
		鋭敏化　More sensitive	14
感情変化 Emotional change	22	ネガティブ　Negative way	6
		ポジティブ　Positive way	16
身体変化　Bodily Change	2	病状悪化　Pathology	2
その他　Others	35	その他	35

＊数値は該当回答数
＊英語表記は『Dark,cold,and hungry,but full of mutual trust:Manners among the 2011 Great East Japan Earthquake victims』論文より

コンビニエンスストアへの調査では心理学研究室の学生の協力も得て、コンビニを一軒一軒回っての聞き取りを行いました。



「東日本大震災における助け合いと犯罪」の論稿が収録された『大災害と犯罪』

「Dark, cold, and hungry, but full of mutual trust Manners among the 2011 Great East Japan Eathquake victims」の論稿

掠奪や暴行などのパニック行為は、場合によっては災害以上の災難をもたらす。もしかしたら次の大災害では、海外や過去の日本のものだと信じていたこの災厄に、日本が襲われることになるかもしれない。次の大災害がやってくる前に、現代日本の被災地で自然発生してきた美徳の源泉を探ること、険悪な被災生活と穏やかな被災生活の分水嶺となる条件を見つけること。今回の震災から学ぶことは多々あるが、今回の分析を通じて、それがきわめて重要な課題であると感じ取ったしだいである。

とまとめています。

これらの知見は、2013年10月にモスクワ国立大学心理学部で開催された研究討議会で発表しました。その内容に新たなデータと考察を加えたものが、ロシアの学会誌『Psychology in Russia』7巻に掲載され、誰でもインターネットから読むことができるようになっています。

(『Dark,cold,and hungry,but full of mutural trust:Manners among the 2011 Great East Japan Earthquake victims』(暗く寒く空腹だが、相互信頼感に満たされていた：東日本大震災の被害者のマナー)

http://psychologyinrussia.com/volumes/pdf/2014_1/2014_1_04-13.Pdf

(2) 海外調査、放射能事故への態度調査も実施

東北の被災者の行動をどう見たか、放射能汚染をどう感じているか、調査の範囲は日本各地、そして海外(台湾・韓国)に広がり、以下のような論文も発表しています。

●Taiwanese perceptions of Japan and the use of nuclear power after the 2011 East Japan earthquake and tsunami disaster.An examination of the role of media and heuristic cues.

(Wiwattanapantuwong,J.,Lee,C.,Honda,A.,& Abe,T.,Tohoku Psychologica Folia：2011)

●The Impact of the 2011 East Japan earthquake and Subsequent Nuclear Accident:A Preliminary Interview Study among South Korean People.

(Wiwattanapantuwong,J.,Zhang,Y.,Honda,A.,& Abe,T.Tohoku Psychologica Folia：2013)

●Japanese University students' attitudes toward the Fukushima nuclear disaster.

(Honda,A.,Wiwattanapantuwong,J.,& Abe,T.,Journal of Environmental Psychology：2014)

図2 ■「逸脱行動」と「利他行為・秩序維持」の比較

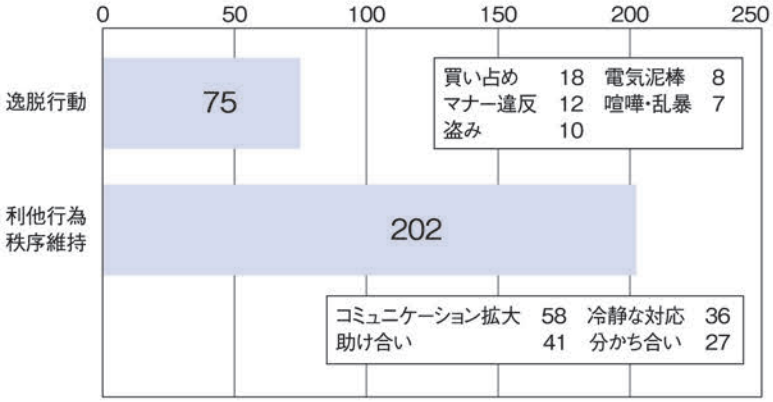


表3 ■コンビニエンスストア調査の概要と震災による閉店・短縮営業

調査対象地域	調査店舗数	回答店舗数	通常営業率	短縮営業率	一時閉店率	平均閉店日
盛岡	20	18	6%	61%	33%	6.8
宮古・釜石	11	9	0%	33%	67%	24.3
気仙沼	15	10	0%	30%	70%	71.6
石巻	22	18	0%	44%	56%	47.3
塩釜・多賀城	21	17	0%	18%	82%	40.3
仙台・青葉区	59	42	0%	43%	48%	4.2
仙台・泉区	13	10	10%	50%	40%	26.8
仙台・太白区	14	10	0%	50%	50%	3.8
仙台・宮城野区	23	22	9%	3%	68%	7.3
仙台・若林区	10	10	10%	20%	70%	3.9
福島	30	23	0%	39%	61%	4.6
いわき	27	22	5%	5%	91%	11.2
(合計)平均	(265)	(211)	3%	35%	61%	28.8

*仙台・青葉区では、一日おき開店など、分類外の営業形態が4件(10%)あった。

表4 ■コンビニエンスストア調査の目隠し対応の実施率とその理由

調査地域	目隠し実施率	平均目隠し日数	理由					
			実際の盗難	盗難の予防	他店に倣った	本部指示	その他	わからない
盛岡	89%	16.4	0%	13%	0%	25%	69%	0%
宮古・釜石	78%	30	0%	43%	0%	29%	43%	0%
気仙沼	60%	45	0%	67%	0%	0%	83%	0%
石巻	78%	38.6	21%	50%	0%	7%	43%	0%
塩釜・多賀城	94%	42.9	31%	63%	0%	38%	56%	0%
仙台・青葉区	86%	25.1	0%	64%	3%	25%	19%	14%
仙台・泉区	80%	31.1	0%	100%	0%	0%	25%	0%
仙台・太白区	90%	20.9	0%	78%	0%	22%	44%	0%
仙台・宮城野区	100%	22.7	18%	100%	0%	5%	18%	0%
仙台・若林区	100%	29.3	0%	60%	0%	30%	80%	0%
福島	87%	13.7	0%	75%	0%	10%	45%	5%
いわき	73%	23.1	0%	69%	0%	6%	56%	0%
平均	85%	32	6%	56%	0%	15%	36%	3%

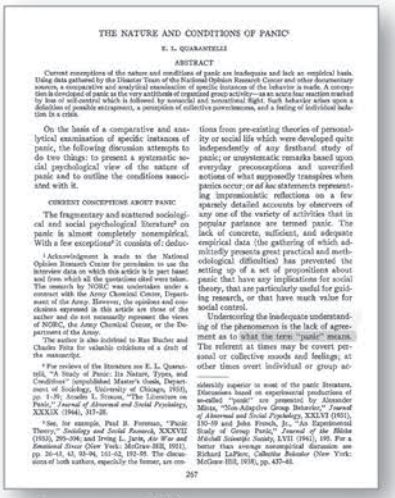
*理由については複数回答のため合計は100%を超える

さらに、災害文化研究への深化

(1) パニック神話・災害神話

これらの調査の結果、阿部教授は災害後のパニックについて、次第に考えを改めるに至り、現在は次のように考えているといいます。

大災害が生じるとパニックや略奪などの逸脱行動が発生するという社会通念は誤りであり、災害時におけるパニックが稀であることは、Quarantelli(1954)以来、すでに多くの研究者が明らかにしてきた。Quarantelli(クアラ・ンテリ)はまた、1980年(12月20日)、「災害研究の現状とその展望」をテーマとして東京で開かれた日米共同研究会に参加して朝日新聞社のインタビューに応答。前月にあったラスベガスのホテル火災の事例では、犠牲者の大半がパニックによる墜落死だと言われたが、実際には83名の犠牲者のうち80名の死因が煙によるものであったこと、ハリケーンや大洪水で80%の人が略奪があったと報告していたが、実際の被害は一割程度であったことを伝えている。このような災害後のパニックに関する誤解は、「パニック神話(panic myths)」(Keating, 1982)、あるいは「災害神話(disaster myths)」(Quarantelli, 1994)と呼ばれている。東日本大震災における称賛は、もともと逸脱行動が稀な災害時において、その頻度が皆無に近い状態であったことに基づいているのではないか。


THE NATURE AND CONDITIONS OF PANIC[1]

E. L. QUARANTELLI[2]

ABSTRACT

Current conceptions of the nature and conditions of panic are inadequate and lack an empirical basis. Using data gathered by the Disaster Team of the National Opinion Research Center and other documentary sources, a comparative and analytical examination of specific instances of the behavior is made. A conception is developed of panic as the very antithesis of organized group activity—as an acute fear reaction marked by loss of self-control which is followed by noncritical and nonrational flight. Such behavior arises upon a definition of possible entrapment, a perception of collective powerlessness, and a feeling of individual isolation in a crisis.

On the basis of a comparative and analytical examination of specific instances of panic, the following discussion attempts to do two things: to present a systematic social psychological view of the nature of panic and to outline the conditions associated with it.

CURRENT CONCEPTIONS ABOUT PANIC

The fragmentary and scattered sociological and social psychological literature[3] on panic is almost completely nonempirical. With a few exceptions[4] it consists of: deduc-

[1] Acknowledgment is made to the National Opinion Research Center for permission to use the interview data on which this article is in part based and from which all the quotations cited were taken. The research by NORC was undertaken under a contract with the Army Chemical Center, Department of the Army. However, the opinions and conclusions expressed in this article are those of the author and do not necessarily represent the views of NORC, the Army Chemical Center, or the Departments of the Army.

The author is also indebted to Rue Bucher and Charles Fritz for valuable criticisms of a draft of the manuscript.

[2] For reviews of the literature see E. L. Quarantelli, "A Study of Panic: Its Nature, Types, and Conditions" (unpublished Master's thesis, Department of Sociology, University of Chicago, 1955), pp. 1–39; Arnold L. Stanton, "The Literature on Panic," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, XXXIX (1944), 313–28.

[3] See, for example, Paul B. Foreman, "Panic Theory," *Sociology and Social Research*, XXXVII (1953), 295–306; and Irving L. Janis, *Air War and Emotional Stress* (New York: McGraw-Hill, 1951), pp. 26–43, 63, 93–94, 151–52, 192–95. The discussions of both authors, especially the former, are considerably superior to most of the panic literature. Discussions based on experimental productions of so-called "panic" are presented by Alexander Mintz, "Non-Adaptive Group Behavior," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, XXLVI (1951), 150–59 and John French, Jr., "An Experimental Study of Group Panic," *Journal of the Elisha Mitchell Scientific Society*, LVII (1941), 195. For a better than average nonempirical discussion see Richard LaPiere, *Collective Behavior* (New York: McGraw-Hill, 1938), pp. 437–48.

267

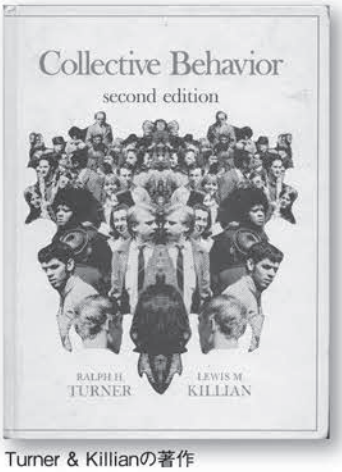
E.L.Quarantelliの著作

(2) 災害時の特殊な規範

阿部教授は、さらに規範の観点からパニック研究史に踏み込み、次のように整理しています。

災害時における逸脱行動については、社会規範の観点が重要だということに気づいた。Quarantelli & Dynes(1970)によれば、災害時においても法的権利は変らないが、財産権の共通認識が変化し、新たな財産権規範(property norm)が創発し、公共財や私財が緊急用に使用される。即ち、生存のための緊急避難的な食糧調達などは、規範が弱体化した結果の逸脱行為ではなく、創発財産権規範(emergent property norm)に準じた行為である。この観点に立てば、これまで私たちの調査で浮かび上がってきた東日本大震災における逸脱行為は、そのほとんどが創発財産権規範に基づいた緊急避難であると考えることもできる。

Turner & Killian(1972)は、過去における群衆の特異な行動を説明する感染理論(contagion theory)、収斂理論(convergence theory)は、両者とも群衆の最たる特徴を「一致」と見なしていることを批判した。そして、異なる感情・動機・行動を持つ成員が、その場に応じて新たに立ち上がった創発規範(emergent norm: Turner, 1964)に準じて行動することを仮定する創発規範アプローチを提案した。創発規範の観点に立てば、災害において社会規範が弱体化したり消失したりするのではなく、それまでの制度的・伝統的規範に代わって、その場・その状況において適切な規範としての創発規範が形成されるのである。創発財産権規範は、この創発規範の一部であると考えることができる。



Turner & Killianの著作

(3) 創発規範と犯罪

阿部教授は、「創発規範」という考え方に依拠しながら研究を深め、2014年6月(28日)に開かれたアジア犯罪学会においては、「The Criminal Perception of Victims after the Great East Japan Earthquake(東日本大震災被災者の犯罪認知)」を発表。その最終ページにおいて、東日本大震災においてどのように犯罪が認知されたかを以下のように6項目にまとめています。

1. 被災程度が高いところほど犯罪認知が増える。
2. 被害の大半は災後2か月以内。しかし、自身の被害は少なく、ほとんどが聞いた話
3. 被害の大きいところでは、「調達」型の犯罪が多いと認識されている。
4. 増大懸念した犯罪を警戒する。
5. 被害が大きいところほど警戒心が強い。
6. やはり自分自身への被害が心配。

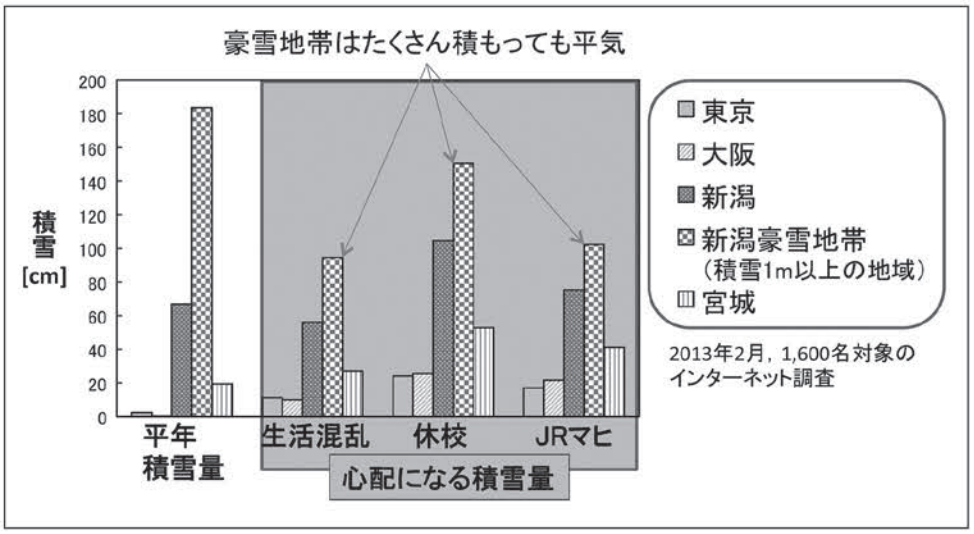
そして、「被災の程度がひどいと、もしかしたら自分も緊急避難的行動に出るかもしれない。ならば他者が窮余の犯罪をしてもおかしくない。犯罪不安の増大は、このような創発規範を介して生じている」という可能性を指摘して発表を結んでいます。

(4) "災害文化"の研究へ

この創発規範は、いつでもどこでも、同じように立ち上がるものではありません。次に大災害が起こったときにも、東日本大震災と同じように穏やかな規範が立ち上がる保証はありません。好ましい創発規範が立ち上がる条件というものがあるはずです。

阿部教授の研究は、規範を形づくる地域の「災害文化」(disaster culture/disaster subculture)の検討へと向かいました。

図3 ■平年積雪量と心配になる積雪量の関係



*出典:「具体的震災対策提言を目指した災害文化の研究」(阿部恒之・平川新・今村文彦・佐藤翔輔)
2014年7月13日 東北大学災害科学国際研究所 特定プロジェクト研究成果報告会(東北大学片平キャンパスさくらホール)

災害文化という考え方は、1965年に出版されたH.E.ムーアの『…and the winds blew』で初めて提唱されました。ムーアは、アメリカのハリケーンを例に取り、ハリケーンが繰り返し襲ってくる地方では、そのハリケーンのハザード(危険)をディザスター(災害)にしないようにする技術と知恵が蓄積されていく、その積み重なりが災害文化だと主張しました。

このような考え方を踏まえて研究した成果の一部を阿部教授は、2012年12月にFM仙台「東北大学防災UPDATE!」で2日間(2日・16日)にわたり語っています(1日目:災害文化とは、2日目:津波の災害文化)。阿部教授は、スタートにおいて、

(前略)地域ごとに、その風土に根ざした固有の文化がある。災害に関しても同様に、その地域特有の知恵が蓄積されている。これを災害文化という。初めて聞いたとき、防災文化とか、臨災文化とか、他にもっといい言い方があると思ったが、すでにこの言葉が定着して市民権を得ていること、そしてあえて災害というマイナスの言葉に文化とつなげる言葉の力強さも捨てがたい。この違和感から見えてくることもあるのではないかと思い、私も災害文化という言葉を使うことにした。

と語り出し、日本全国に見る災害文化の事例、日本各地域の災害文化、災害文化研究の重要性、津波の災害文化、津波の災害文化が機能しなかった東日本大震災、なぜ津波は災害文化を形成しにくいかと語った上で、エンディングにおいてこう語りました。

新潟県の魚沼地方などの豪雪地帯では、毎年3メートル以上の積雪がある。これは傍から見たら災害であって、そこに住む人に大きな負担となっている。しかし同時に雪はスキー場などの観光資源であって、たんなる災害源ではない。豊かで清冽な水がたとえば魚沼産コシヒカリを育み、おいしいお酒を造る。災害の元は宝の元でもある。そこに住むにはそれだけの理由がある。

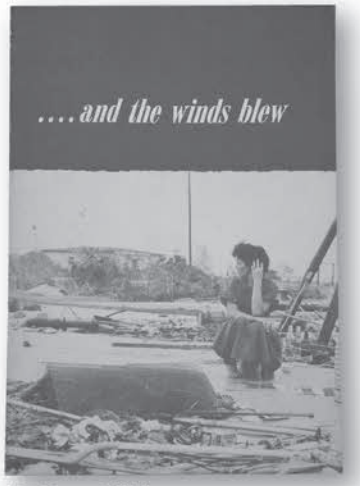
但し、そのためには、やられても大丈夫という備えをしなくてはならない。たとえば東京で20センチの雪が降れば交通マヒを生じるが、雪国では何の問題も生じない。東京や大阪の人たちは10センチほどの積雪で生活は混乱すると考えるが、雪国の人は1メートル近くまで余裕を持っている(図3参照)。それは消雪パイプ、除雪作業車、各家庭の融雪屋根など、雪対策の仕組みが標準装備されているからである。これは長年、高頻度で大雪に見舞われてきたことによって、その対策が講じられ、それが文化として定着したからだ。

三陸の場合も、海は津波をもたらすが、海の幸をもたらしてくれる財産であり、誇りである。しかし、雪国で豪雪対策が文化として定着しているのに対して、三陸では津波対策が文化として定着していなかった。たとえば、「これより下に家を建てるべからず」といった津波記念碑が三陸沿岸にたくさんある。この記念碑を文化として継承するには、全ての住宅を建てるだけの十分な面積の高台が必要となるが、三陸はリアス式海岸で、程よい高台は少ない。また急峻な傾斜のために、高台は地滑りなど、より頻度の高い他の災害の危険が大きい。対策の必要頻度がきわめて低い津波への備えは後回しとなり、文化として定着しにくい。

だからこそ、ここで津波についても災害文化としての知恵を編みだし、伝承していかなければならない。しかし、頻度がきわめて低い津波の場合には、津波の災害文化が自然発生的に醸成するのを待つことはできない。ではどうするか。それは、科学と歴史の力を借りることである。津波発生のメカニズムや被害の推定精度を上げることなどで、正確な津波警告を発信する。これが科学の役割。そして、日本中いたるところに津波の危険があり、被害が繰り返されてきたことを正しく認識する。これが歴史の力。こういう研究によって、「突然」「油断」「低頻度」のリスクを減らすことができる。

あとは、警報を周知する方法を確立し、避難場所を確保し、安全な住居を建てる。こういった細かで具体的な工夫を蓄積することで、津波の災害文化ができていくと思う。

そして阿部教授は現在、望ましい創発規範が立ち上がるための災害文化の必要性を考えています。いざというとき、いかなる振る舞いが望ましいのか、それを大災害の起こる前から地域住民で共有化し、被災者のマナーとして身に着けておくことが必要である。つまり、科学・歴史、そして教育が、災害の被害を最小化する原動力になるのではないか。このような観点で研究は続けられています。



H.E.Mooreの著作

文学部へ行こう

東北大学は1907年（明治40）6月22日に創立し、文学部の前身である法文学部は1922年（大正11）に開設されました。2011年、東北大学も3.11東日本大震災の被害を免れませんでしたが、その体験も活かしながら、さらに研究、教育活動を深めています。

特集

東北大学文学研究科・文学部の総合性（リベラルアーツ）を地域へ、企業へ、世界へ

「研究第一」「門戸開放」「実学尊重」の東北大学

東北大学には、1907年（明治40）の創立以来、日本を代表する国立大学として世界に通用する高度な研究と学術知の蓄積を目指す「研究第一」という理念に加えて、日本の国立大学で最初に女性学士を受け入れるなど広く窓を開いた「門戸開放」、社会に役立つ研究活用を目指す「実学尊重」という理念があります。

文学研究科・文学部では、文学研究の総合性（「リベラルアーツ」と呼ぶことがあります）を大学の中に留めてしまうのではなく、幅広い人々に理解してもらい、役立ててもらえるものにしようと、地域へ、企業へ、世界へと視野を広げ、講演出版企画委員会（委員長：高橋章則教授）が中心となっての社会連携・知の循環を模索しています。

2014年 有備館講座

2014年 齋理蔵の講座

「有備館講座」「齋理蔵の講座」で地域社会へ

そのつが、仙台以外の地域へも飛び出そう、でした。交通や情報流通や施設の問題から"文化"の地域格差が生まれてしまう周縁部にまで視野を広げ、地域へ発信しようという考えです。

2005年4月、現在の大崎市岩出山で「有備館講座」を立ち上げました。岩出山は仙台藩の仙台城下町経営以前の歴史をとどめる町であり、有備館は仙台藩岩出山伊達家の別荘かつ学問所であったところであり、建物と庭園が国の史跡名勝となっているところです。

次いで2008年9月には、県南にもの要望を受け、丸森町で「齋理蔵の講座」を開催しました。丸森町は、阿武隈川の舟運なども利用して繁栄した県南の物流の町であり、養蚕や糸取引で財を成した豪商の屋敷である齋理屋敷には何棟もの豪奢な蔵が残っています。

県北と県南を代表する城下町と商人の町は、文学部にとっても強い絆が感じられる場所でした。地域の自主組織である実行委員会と自治体の教育委員会の方々の運営により、自主的に会場の設営・撤収、広報が行われる中、文学部では、〈いっしょに「学問」してみませんか〉をスローガンに、講座を設計。地域づくりのアイテムとしても利用してもらえるようテーマを吟味し、さまざまなジャンルからの講義を続けています。なお「有備館講座」では、より地域に密着できるよう、岩出山以外の町での一部講座開催も含めるようになっています。

これらの成果は「人文社会学講演シリーズ」のタイトルで単行本にまとめ、東北大学出版会から発行。研究者にとっては講演すれば本になる、地域にとってはこの町で話されることが本になるというシステムをつくることにより、一緒に学問することへのモチベーションを向上させるよう努めています。

講演シリーズは『Ⅰ 東北—その歴史と文化を探る』、『Ⅱ 食に見る世界の文化』、『Ⅲ ことばの世界とその魅力』、『Ⅳ 東北人の自画像』、『Ⅴ 生と死への問い』、『Ⅵ 男と女の文化史』、『Ⅶ 「地域」再考—復興の可能性を求めて—』の7巻にまで広がっています。

「企業連携講演会」などで企業社会へ

地域講座に集まる人からさらに、より若い世代へ、あるいは企業社会の中へ入っていくことはできないか。社会連携の視点は、新しいステージづくりへと進みました。

2014年2月、東芝の協力を得て、学生、教職員を対象としての企業連携講演会を開催。「東芝の人財育成について　東芝の求める人財像」と題して、東芝総合人材開発株式会社・金井淳常務取締役（1983年、東北大学経済学部卒）の講演を開催しました。その内容は、①東芝の人財育成について、②人財育成とリベラル

［取材協力］
文学研究科 講演出版企画委員会 委員長
高橋章則教授

アーツについて、③東芝の求める人財像について（採用活動を含めて）を柱に、文学部ならびに文化系の教養の企業内での意義、採用活動の実際などについての話となりました。

実は東芝は、国内企業の中では、企業人にとっての「リベラルアーツの必要性」に最も早く着目した企業でした。社内で実施している人材教育研修では、まるで文化系の大学院や研究室のラインナップのように幅広い文化講座が設定されています。その内容は、海外駐在員が土産に持っていくものとして、日本の文化を感じさせることのできるものは何か、相手国と日本とに似たようなものがありながら、差異を比較できるものは何かなど、生活に身近な具体的なことでありながら、本質的なこととなっています。講演出版企画委員会ではそのような東芝との連携を深めることを模索し、高橋教授が「日本文化についての研修」という講座を受け持つといったところまで辿り着いています。

東北大学文学研究科・文学部が、その知的蓄積を総動員したら、企業の人材教育研修などに対してどのような実学的講座設計を提案できるか。「東北大学文学研究科・文学部には、全部できます」と言えるか。委員会では、次のステップとして、そのような総合的な視点を提示するところまで意識しています。

「文化理解（解釈）のキーワード」で世界へ

当然、視野は国内に限らず、世界へと広がります。

文学研究科は、イタリア・ローマ大学サピエンツア文学部・東洋研究学部、オランダ・ライデン大学人文学部との連携による国際学術交流事業を設計。大学の組織の違いや、学問領域の構成や内容の違いなどを乗り越え、3大学教員の研究成果を国際的なものに高め、成果を共有・認知することを目指しました。

「文化理解（解釈）のキーワード」をテーマとして、2013年にローマで、2014年にライデンで国際シンポジウム・共同討論を行い、広く学生、一般人の聴講へと公開しました。2015年には仙台で開催する予定となっています。なお、2013年の開始段階では、「文化理解（解釈）のキーワード」のテーマは、有備館講座、齋理蔵の講座のテーマともなりました。

2013年 ローマ大学シンポジウム

ローマ大学サピエンツア正門

そして、一巡した2016年には、この成果を英語を含めた4か国語併載で書籍にまとめることとなっており、順次、編集が進んでいます。

「21世紀のシーボルト養成プログラム」で世界へ

そして2014年、10月から「21世紀のシーボルト養成プログラム」と名づけた、オランダのライデン大学をはじめ、イタリア、フィンランド、インドネシアなどの外国人留学生を短期受け入れするプログラムがスタートします。日本学生支援機構の「海外留学生支援制度」の認定を受けた「複数領域横断型日本学研修プログラム」です。

ライデン大学は、世界で最初に日本学研究所が開かれた大学であり、江戸時代、長崎出島を中心に活躍したフォン・シーボルト（日本滞在1823-28年）が教壇に立った大学です。ライデン大学附属植物園には、シーボルトが日本から持ち帰ったイチョウやフジが生きています。この大学との連携を意識し、21世紀のシーボルトなら、現在の日本で何をするか、という視点を盛り込みました。

イタリアに関しては、新しくヴェネチア、ナポリ東洋大学、フィレンツェ（予定）と学術交流協定校としての協定を結ぶなど、文学研究科のイタリア研究者が中心となっての連携強化を目指しています。

ヨーロッパが満ちあふれるキャンパスというイメージづくりも強まっています。

ライデン大学

インフォメーション1

青春のエッセー 阿部次郎記念賞 第8回作品募集中

夏目漱石の門下生であり、『三太郎の日記』などの作品でも有名であった阿部次郎（1923-45年東北大学法文学部在職。哲学・美学）の記念賞を設け、全国の高校生（高専1～3年生も含む）の作品を募集する「青春のエッセー」。河北新報社、株式会社七十七銀行、日本GE株式会社の協賛をいただき、2014年度で第8回を迎えます。

課題作品の課題は「ふるさと」、ゲスト選考委員は哲学者・エッセイスト・鷲田清一氏（せんだいメディアテーク館長）となっており、9月30日の原稿締切、11月3日の選考結果発表の予定です。

全国の高校生の皆さんの応募をお待ちしています。

問合せ先：阿部次郎記念賞運営委員会事務局（http://www.sal.tohoku.ac.jp/pg45.html）

なお、第1～7回の作品集は若干の在庫がありますので、事務局宛てお申し込みください。

[2013年度の選考結果]

2013年度は、165点の作品の応募をいただき、選考の結果、下記のように受賞者・受賞作品・受賞校が決まりました。

課題作品の部　課題「歴史」

●最優秀賞

「『歴史』というものへの認識」
石田薫さん（兵庫県 加古川高等学校2年）

●優秀賞

「××13年ー四次元と空間から考える歴史」
油井瞭太郎さん（長野県 長野高等学校1年）

「そして私は今を生きるーファミリーヒストリー」
高橋晴子さん
（秋田県 聖霊女子短期大学付属高等学校2年）

自由作品の部

●最優秀賞

「壁の向こう」
松本紗織さん（千葉県 市川高等学校2年）

●優秀賞

「十七歳」
玉木千裕さん（長野県 長野高等学校2年）

「旅で得たもの」
杉山玄己さん（長野県 長野高等学校2年）

●学校賞

長野県　長野高等学校
兵庫県　加古川高等学校

2013年度ゲスト選考委員の佐藤賢一氏と受賞者のみなさん

青春のエッセー 作品集の中国語版発刊

2011年9月には、第1～3回作品中31編を収めた中国語版の作品集が、『思考的青春』のタイトルで上海の出版社（山東文藝出版社）から刊行されました。上海外国語大学の日本語・日本文学の研究者が校閲を行っています。日中両国の相互理解につながることも期待されます。

ワンポイントコラム

仙台城跡へ、仙台市博物館へ足を伸ばして

川内キャンパスを訪れた際には、ちょっと足を伸ばしてみたいのが仙台城跡や仙台市博物館ですね。

仙台城跡は東日本大震災で崩れた石垣が順次修復されているものの、まだ車での通行はできませんが、歩いて坂を登り城跡へと行くことはできます（青葉山の工学部経由でなら車での通行も可能です）。

また、仙台市博物館では、支倉常長と慶長遣欧使節団が持ち帰った「支倉常長像」「ローマ教皇パウロ五世像」「ローマ市公民権証書」の3点が、2013年6月に「ユネスコ記憶遺産」に登録されました。この3点は国宝に指定されている「慶長遣欧使節関係資料」の中の資料であり、博物館では、1613年にサン・ファン・バウティスタ号で太平洋を渡って行った使節団に関連する多彩な資料を見ることができます。

支倉常長像

ローマ教皇パウロ五世像

ローマ市公民権証書

インフォメーション 2

10月1日、東北大学附属図書館リニューアルオープン

東北大学でも、東日本大震災からの影響で、川内キャンパスにある附属図書館が大規模改修工事のため本館1号などの利用ができなくなっていました。

しかし、2014年10月1日、工事が完了し、リニューアルオープンする予定です。その移動作業のため、8月4日～9月30日の期間は全面閉館予定となっていますのでご注意いただくとともに、ホームカミングデーや紅葉の賀などの機会には、どんなに変わったか、どんな利用ができるか、新しい図書館を覗いてみてはいかがでしょう。

インフォメーション 4

11月3日、東北大学植物園で紅葉の賀

11月3日には、東北大学植物園をメイン会場として、文学研究科と植物園との共催で紅葉の賀を開催します。2005年に始まったこの催しも恒例の行事となり、今年で10回目を迎えます。

2013年度は、野点、俳句会、尺八演奏、植物園内ガイド付き散策も例年どおり行われ、公開講演会では「青春のエッセー」ゲスト選考委員・佐藤賢一氏（直木賞作家。文学研究科修了）が「川内キャンパスのころ」のタイトルで講演を行いました。また、「青春のエッセー」の選考結果報告会、俳句会授賞式なども行いました。

インフォメーション 3

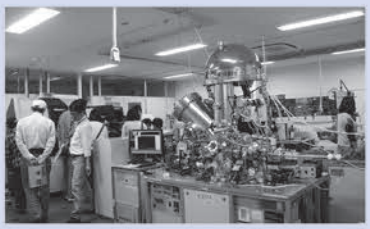
10月11日、ホームカミングデーにようこそ

2014年10月11日（土）、恒例となった東北大学ホームカミングデーが、川内キャンパス「百周年記念会館」で開かれます。

14～16時には「変える、変わる仙台のまちとくらし～仙台市営地下鉄東西線開通を来年に控えて～」のテーマで仙台セミナー、17時15分～19時15分には記念コンサートが予定されています。

また、11時～15時30分、16～17時には、例年どおり在校生と卒業生との親睦会も予定されています。

問合せ先：東北大学萩友会事務局（総務企画部広報課校友係）（http://www.bureau.tohoku.ac.jp/alumni/）



ホームカミングデーの様子を伝える写真は2013年度の撮影

文学部 ゆかりの 宝もの 9

教員たちの活動の様子は、原田夏子・原田隆吉著『回想　東北帝国大学』(2007年)、大平千枝子著『父　阿部次郎』(1999年)や、『ものがたり　東北大学の至宝』(2009年)で知ることができます。原田夏子・原田隆吉氏は法文学部で阿部次郎、小宮豊隆らに学んだ経験から、大平千枝子氏は阿部次郎三女であり、かつ法文学部卒業生であったことを基にまとめており、いずれも東北大学出版会からの発行となっています。

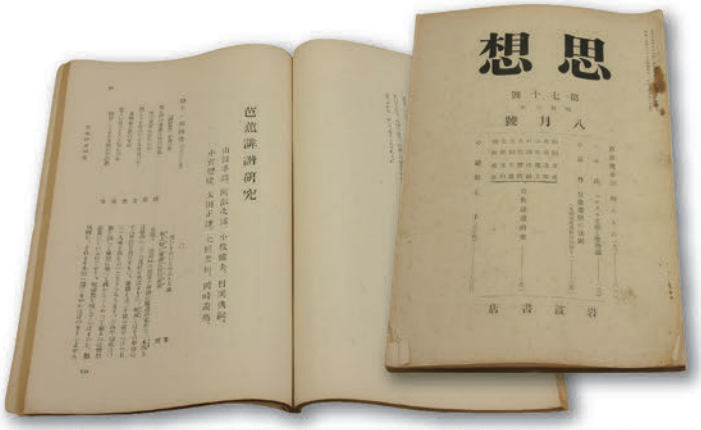
東北大学史料館に残る 文学部教員の遺品

1923年(大正12)、東北帝国大学に法文学部が開設されると、夏目漱石門下の阿部次郎(1883-1959。美学。1923-45年東北大学在職)、小宮豊隆(1884-1966。ドイツ文学。1923-46年東北大学在職)ら、少壮気鋭の研究者が集まりました。

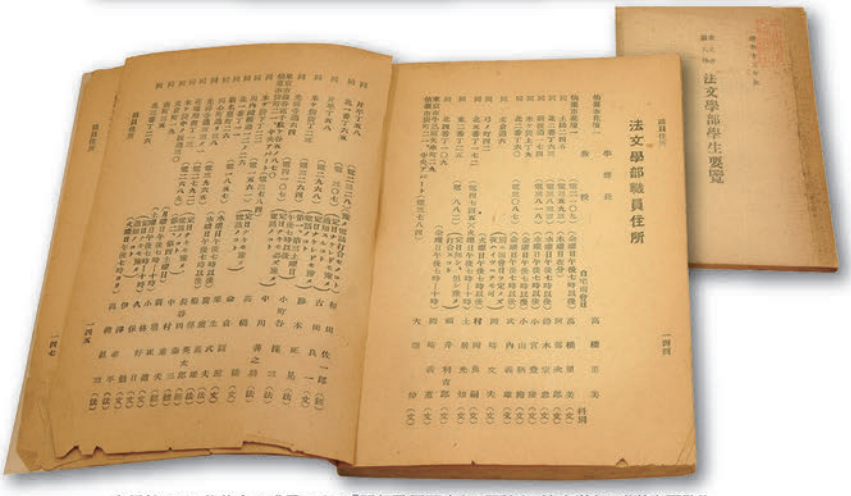
阿部、小宮は、東京で行っていた「芭蕉俳句研究会(芭蕉会と略称)」を仙台へ移し、山田孝雄(国語学)、小牧健夫(ドイツ文学)、村岡典嗣(日本思想史)、太田正雄(医学部)、土居光知(英文学)、岡崎義恵(国文学)とともに向山の上り口にある東洋館で研究会を開始しました。当時の日本で考えられるトップクラスのメンバーであり、談論風発、ドイツ語やフランス語が飛びかい、芸術論や思想論が語られ、俳句が詠み合われる会となり、「仙台向山に俳諧城あり」といわれました。会は、その後、メンバーに変化はあったものの1946年(昭和21)頃まで続き、井原西鶴、連歌、古事記、日本書紀等の研究へと進み、連歌創作も行われました。東北大学史料館には、それらの成果作品が収蔵されています。

教員たちは、学部の垣根を越えた知的交流にも積極的で、書画をたしなむ「書画会」、酒をくみかわす「無名会」も開いていました。

また阿部、小宮は、自らが体験した夏目漱石の木曜会にならい、学生との交流にも力を入れました。教授陣が希望の曜日・時間を指定して学生と懇談するというものですが、その様子はサロンのようだったともいわれます。史料館に残っている当時の〝法文学部学生要覧〟から水曜が阿部、木曜が小宮など、担当教授の名を知ることができます。



芭蕉会の成果の一部は『思想』に連載されたものが『芭蕉俳諧研究』『続芭蕉俳諧研究』『続続芭蕉俳諧研究』『新続芭蕉俳諧研究』として刊行(岩波書店。1929-1933年)されているほか、東北大学史料館 には手書きの俳句作品なども残っています。



史料館には、芭蕉会の成果である『記紀歌謡研究』の原稿も、法文学部の“学生要覧”(写真は一部拡大)も残っています。

［発　行］東北大学大学院文学研究科　〒980-8576　仙台市青葉区川内27-1
tel.022-795-6003（総務係）　fax.022-795-6086　［URL］http://www.sal.tohoku.ac.jp/index-j.html
［編　集］文学研究科研究広報室　［発行年月］2014年7月